

第10回

全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

発表

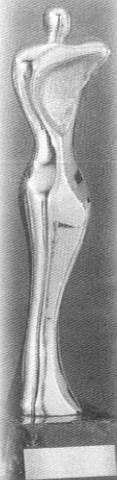
全国同人雑誌振興会・文芸思潮による第九回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇一六年七月二十四日曜日に東京都大田区民プラザ会議室において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって厳正に行なわれました。作品ごとに選考委員から熱い批評が発せられ、濃密な議論が交わされました。選考の結果、以下のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに発表させていただきます。

「まほろば賞」受賞作品には、賞状と賞金十万円（賞金は寄付によるものです）および記念トロフィー、また今回は特に木内是壽氏の特別寄贈により、第十五世沈壽官作の薩摩焼陶器花瓶を贈らせていただきます。また特別賞には賞状と賞金五万円・記念トロフィーを、河林満賞には賞状・賞金五万円と記念品を、また優秀賞には賞状と賞金三万円・記念メダルを贈らせていただきます。

第10回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞



「送り火の夜」

〔季刊作家〕86号

津田一孝



第10回まほろば賞特別記念品
第15世沈壽官作
薩摩焼陶器花瓶
木内是壽氏寄贈

特別賞

「沈む町」

〔安藝文学〕84号

武田純子

河林満賞

「ゲッコウジャポニクス」

〔狐火〕20号

澤つむり

五十嵐勉賞

該当作なし

優秀賞

読者賞

「花ことば」

〔海峽〕33号

多嶋海彦

「物狂いの石」

〔カブリチオ〕43号

草原克芳

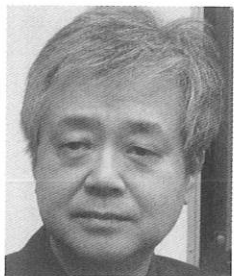
「馬乗り馬頭観音の里」

〔全作家〕97号

嶋津治夫

まほろば賞賞金は、来の宮あんず氏、原石寛氏、夏目火美子氏、木内是壽氏、今田真理子氏の御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「群系」「安藝文学」「べん」「海」「彩雲」など文芸思潮同人誌団体委員の御協力にも厚く御礼申し上げます。

選評



みた まさひろ
1948 大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同盟」
「空海」「親鸞」など
日本文藝家協会副理事長
日本ペンクラブ理事
著作権情報センター理事
日本点字図書館理事
武蔵野大学文学部教授

同人雑誌の高いレベル

三田誠広

武田純子さんの『沈む町』が印象に残った。引きこもりの若い女性が田舎の実家に帰り犬の散歩をするという設定だが、彼女の前には霧が広がっている。この霧は外界を恐れ、拒否しようとしている心理が生じさせたヴェールのようなものだろう。そのバリアーのような霧の中で、彼女は「ダックスフントのおばあさん」と出会う。これは閉ざされた病者の内面に現れた幻想の人物だが、この人物と会話

澤つむりさんの『ゲッコウジャポニクス』は困難な境遇にある中年女性のヒロインが、ヤモリとの対話によって救われる話で、カフカの手法とっていいのだが、ヒロインの追い詰められ方が中途半端で、切迫感に欠けるし、広い読者にうったえかける普遍性もない。しかし突如として現れるヤモリとのやりとりは微笑ましく、爽やかで楽しいお話になっている。文章のテンポがよく、嘘みないな話を語りきってしまふ筆力があって、作品としては安定している。佳作として評価すべき作品だろう。

草原克芳さんの『物狂いの石』も筆力があり、お話としては充分に楽しめる作品になっている。宇都宮の釣天井というのがテーマで、頭上から大量の天井石が落ちてくる恐るべき殺人兵器のごとき仕掛けについて、執念のように研究に没頭している郷土史家が登場する。この男の物狂いのような執念が読者をどこまでも引っぱっていく。この人物のキャラクターは秀逸で、作品を一篇読み終えたあとの印象の強さでは、この作品が群を抜いていた。ただ語り手となっている主人公の設定が弱く、この物狂いの人物が主人公とどのように関わっていくかということが、充分に描かれていない。そこを描くのが文学ではないだろうか。強い印象を残す物狂いの人物は、地震で崩れた石や瓦礫に埋もれて死んでしまう。主人公がただ理屈を並べるだけで、この狂気の人を傍観しているような印象を残してしまうところ

することで、彼女は他者と交流し、他者を受け容れる第一歩を踏み出す。リアリズムから幻想へのつながりがスムーズだし、幻想の世界に一步踏み込んだところで筆を止めた。この「おばあさん」の台詞にも深みがあって、作者が充分に距離をとって対象を描いていることがうかがえた。

多嶋海彦さんの『花ことは』は亡くなった兄の妻に父の看護を任せている次男が実家に戻り、父の悲惨な様子や、自殺したとされる母の想い出、そしてはかなさの中に色香を失っていない兄嫁への思いを描いた作品だ。タイトルの花ことばも重要なアイテムだが、冒頭に引用されている斎藤茂吉の短歌の中にある「剃刀」がキーワードになっている。自我を押し殺すようにして義父の看護にあたっている兄嫁が、剃刀で父のひげを剃っているシーンが鮮やかで、血まみれで死んだ母のイメージと重なり、この薄幸の女性の内部に秘められた殺意と欲情が、剃刀の鋭いきらめきに象徴されている。安定した筆致で、中間小説としては完成度が高い見事な作品だが、主人公の次男の内面が充分に描かれていない点、純文学としては深さを欠く。あまり内面に突っ込まずに程よくまとめるのが中間小説の手法で、こういう作品が同人誌にあってもいいと思う。わたしは作品としての完成度の高さを評価したのだが、他の選考委員の賛同を得られなかった。

ろが、作品の物足りなさになっている。

嶋津治夫さんの『馬乗り馬頭観音の里』は、前回『地の来歴』という作品で高く評価された人の続篇のようなものだが、小説らしくない小説というスタイルの新鮮さが、今回ほうすれたように感じられた。前回はきっちり説明されていた作者の立ち位置が、今回はまったく示されず、馬頭観音をただ見に行くだけの話になってしまった。北総の来歴に言及された部分は読んでいて楽しく勉強にもなったが、この地になぜ馬頭観音が多いのかについては考察が不足している。かつては自由に野を駆け回っていた野生の馬たちが、農地の開発でしだいに追い詰められていくことへの哀しみと罪悪感が、水子供養の地蔵のように、馬に対する思いとなって馬頭観音が作られたのではないか。農業が実は自然破壊なのだという批評性がほしいように思った。

津田一孝さんの『送り火の夜』は登場人物のほぼ全員が死者だという珍しい設定の作品で、リアルな世界と強い絆でつながったファンタジーなのだろうが、次々と話が展開していく語りの巧みさと、トリッキーな最後のどんでん返しに不自然さを感じさせない筆力が高く評価され、満場一致で最優秀作に決定した。ただ不満を言えば、主人公も実は死んでいるという設定は悪くはないのだが、その死に方があまりにも不条理で、こういう処理でいいのかと疑問の余地が残った。その点を除けば、細部まで行き届いた描写

力が傑出していて、最後に読者はすべてが幻想だと知らされる。そこまでの展開に充実感があって、読者は欺されたと感じるよりも、不思議な感動を覚えるようになっていく。毎回思うことだが、同人誌のレベルは高い。そのレベルの高さは、ライトノベルや挿物帖の類を愛好する一般読者の知的水準とは乖離しているのかもしれない。何万人もの読者を必要とする商業出版社の手の届かないところに、脈々と培われた文化がある。その貴重な文化の場である同人誌を守り続けてほしいと願わずにはいられない。



こはま きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マナー
ジャーを務めるかたわら文学修行
88 「風の河」で文学界新人賞を受賞
他の作品に「消える島」「後生橋」
「光の群れ」「火の闇」などがある

五十歳を過ぎてからの情熱

小浜清志

陽花が「七変化」、クチナシが「私は幸せ者」「優雅」という花ことばを伏線にして秋子の好きな花ことばがあまり良くないという疑問を主人公の二郎は持ち続ける。遠方を理由に半年に一度くらいしか寝たきりの父の住む実家には戻ってこないが、独身の二郎と父親の面倒をみている秋子の関係を、世間は異なった見方をしていることを友人から告げられる。それは、二郎の胸の奥に寝ていたものを起こされる結果となり秋子の好きな花は夕顔ではないかと連想する。夕顔の花ことばは「はかない恋」「魅惑の人」そして「罪」。二郎はついに強引に秋子を自分の布団に引き寄せるといふ所で、小説は終了するが、剃刀にまつわるエピソードが凄惨すぎて私は未だに消化不良である。

嶋津治夫氏の「馬乗り馬頭観音の里」は馬頭観音にまつわる地理と歴史を非常なる博学で書いていて勉強になったが、小説という感動はあまり湧いてこなかった。

竹田純子氏の「沈む町」は味わいのある作品である。濃い霧に沈む引越先の町。田舎の祖母の認知症がひどくなったので引きこもっていた私も両親にくっついて祖母の家に行くことになり、チョコという犬の散歩だけが日課という生活が始まる。自立できない自らの霧と、晴れる日に濃い霧が発生するという田舎の自然現象は、隙間なく重なり、読み手の心にひそむ霧さえも湧き出させる。

だが、この作品には引きこもりであるが、犬の散歩と称

今年も力作揃いであった。同じ書き手として優秀作を読んでいる、自らの非力を痛感させられたことを先に告白する。書くことは技術は勿論であるが、物の見方や捉え方といった人間力が大きく左右することは言うまでもない。しかし、何よりも書く情熱がなければ一歩も前に進むことができない。ある人が本当の情熱とは五十歳を過ぎてから現れると表現していた。今回の優秀作のほとんどが五十歳を超えていて文学の裾野はこのような人たちがあふれるような情熱で開拓しているのだと感動している。

さて、各々の作品に私なりの感想を述べさせて頂く。掲載順に、まず澤つむり氏の「ゲッコウジャポニクス」であるが、筆力もあり作品世界の進め方もしつかりしている。編集長との確執、同棲相手への不信などが、ある朝現れたヤモリという存在とからまり小説の奥行きを広げる手法は見事ではあるが、事故によって馬尾神経を損傷したという話とヤモリの尻尾は切られてもすぐに生えてくるという挿話がうまくリンクしていれば、読み手の想像が更に飛躍したであろう。このようにいくつかの挿話に魅力はあるのだが、相乗効果を与えることができなかったという部分が残念であった。

多嶋海彦氏の「花ことば」も魅力ある作品である。齋藤茂吉の短歌に暗示されるように、未亡人となった兄嫁の秋子との関係あやうい関係が次第に浮かびあがってくる。紫して外出できること、濃い霧は晴れの日を約束されているという希望をのぞかせていることが温かい。認知症と言う霧がいつ出てくるのだろうと期待していたが、それはなかった。散歩中に行き合う、おばあさんが認知症の祖母かとも深読みしたかった。

草原克芳氏の「物狂いの石」は不思議な作品である。吊り天井、オサカベ、ケンゾウ、過去の歴史とかなりの変人。そして主人公は事業に失敗して妻の実家のはなれに住んでいる。小説に値する材料は次から次へと出てくるが、話が話を生んでいくだけで深まりがない。作者は自らの作品を楽しんで書いたのではないかと推測もしてみた。小説とは、共感部分を作るために真実といわれるリアリティを具えていなければ綻びが見えてくる。そうならないためには、どこかに作者だけが持っている言葉配置しなければならぬだろう。書く作業というのはそのためにはあるとも言える。筆力もあり、豊富な知識もありながらこの作品が伸びていかないのは作者の独りよがりが強すぎるのかもしれない。充分名作になり得る小説をこのまま放置しておくのは惜しいと思っっているのは私だけではないと思う。

最後に津田一考氏「送り火の夜」であるが、私はこの作品に対して評を述べる立場ではないと思っっている。完全に脱帽である。素晴らしい作品である。選考委員をさ

高めている。読後、不思議な宥和感に誘われるのは、筆者の死者に対するやさしい眼差しが貫かれているからで、鎮魂の祈りがその底に鏤められているからだろう。選考委員全員がこの作品を推し、文句なく受賞の一作だった。めずらしいこの領域を津田氏にはさらに追究してもらい、因果と霊のドラマを開拓していただきたい。

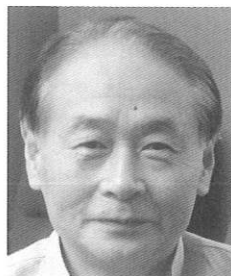
特別賞の武田純子氏の「沈む町」は、発想と感覚が鮮やかで、この方法に乗せれば、現代のさまざまな問題がおもしろく俎上に上がるのではないかと、応用と発展を感じさせる新鮮さがあった。霧の扱ひ方が独特で、本来自分と社会の間の違和感を霧で表現しているものでありながら、これを積極的に使った場合、社会の方が断罪される奇妙な逆転の可能性を秘めている。この霧の上にはおそらく何でも乗せることができるだろう。例えば原発も、核戦争も、ロイン地獄も、カードの緊縛も、およそ現代文明の持つ奇妙さや矛盾を霧を通して見、文学的解析をあたえることができる。筆者がどこまで自覚しているか別にしても、大きな可能性を感じさせる発想と装置であることに注目した。

河林満賞を受賞した澤つむり氏は、前回の「家族の樹」に続いて旺盛な筆力を示し、豊かな造形力を持っていることを知らしめた今回の作品だった。読者にもこれを指示する人たちが多く、鬱屈した現代の心細い生き方をヤモリという小動物に託して乗り越える小説構築は、やわらかで織

細な生き延びを示して救われる。ざらつく現代の日常の奥にある救済と癒しを暗示して、先祖の居場所に帰るような安心感が添えられている。佳品と見た。

多嶋海彦氏の「花ことば」は、文章の洗練度は高度なものを感じたが、熟読すると無理な構成が本来の味を消している気がした。男女の引き合いの間に置かれたものが、溶け合わずに逆に違和感を響かせている。寝たきりの父、嫂のカミソリ、実家が研ぎ師だったこと、よく作られているように溶け切らない異物のまま読後を揺らせている。熟練の技量に、どこか人口的な細工感がある。文章の研磨感と人工的な細工感との間の齟齬をもう少し知りたい。次作に期待している。しかしこの作品には支持者が多く、読者賞に輝く魅力があることは注目している。

前年に続いている嶋津治夫氏の「馬乗り馬頭観音の里」は地の歴史をこれも明瞭に載せていて、時空の広がりを感じさせる点で独特の構築を示している。前作に比べて人間の動きが少ない分、後退した印象があった。氏はいつかは、この大地と歴史の制約の中で人はどう生きて死んで行くのか、そのあり方の当為に直面せざるを得ないだろう。歴史はそこにある。地の相はそこにある。では死んでいく人間は何をよすがに生きればいいのか、その格闘の意味は何か、あらためて文学の根を問わざるをえないだろう。それに直面し、乗り越えた時、氏の文学は大きな飛躍を遂げるだろ



いがらし つとむ

着想と新領域

五十嵐勉

1949 山梨県生まれ
早大文芸科卒。
79「流瀆の島」で群像新人長編小説賞受賞
84-90 カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長
主著『緑の手紙』（読売新聞・NTTプリンテック「インターネット文芸」最優秀賞）、「鉄の光」「ノンチャン、NONGCHAN／聖丘寺院へ」「破壊者たち」「文芸思潮」編集長

第十回のまほろば賞は、前回のようなパワフルな作品はなかったが、新鮮な味の良いものが揃った。同人雑誌の作品は地味で、日陰花のような先入観を被せがちだが、実際の作品の質は、最近の芥川賞よりもよく、実力ある書き手が真摯な創作を続けていることがよくわかる。逆に汚れた俗世間で一時的にもはやされて、不如意な作品を多産して筆を汚していくよりは、こういう着実な創作で文学の根を踏み固めて行くほうが、文学本来のあり方としては本流かもしれない。このまほろば賞の候補にならない作品の中にもかなりいいものが埋もれている気配があり、日本文学の底流がいまだに固く続いている印象を抱いた。

今回のまほろば賞、津田一孝氏の「送り火の夜」は、人間の世界と冥界との境目を舞台にした希有な作品で、浮かばれない魂のあり方と行方に深く触れたあまり類例を見ない小説だった。確かにこの世では運命に見放された人間、不遇の人間がいて、その悲運のうちに死んでいった魂はもう永久に浮かばれないのかという疑問は常にある。その領域を根拠に、主人公をはじめ、企業で利用された友人、貧困や貪欲の生け贄になった女性などをうまく配置して、彷徨う魂の姿を浮かび上がらせている。母娘の女性霊は魅力的で、はかなさのなかに美しい魂が残る。また主人公自身が山で暴漢に家族とともに惨殺された存在で、それが最後に明らかになる仕掛けで物語が終わるところも、鮮烈さを

うと思われる。楽しみにしている。

草原克芳氏「物狂いの石」は発想が現代にマッチしている、うまく立ち上げれば大滑空をしていく素材が、途中で終わっている未発火の不満が残った。將軍を暗殺する吊り天井の陰謀がおもしろく、いつ落ちてくるかもしれない不安は、実はもっと普遍的なものを蔵していて、現代の社会そのものが吊り天井の構造を不気味に持ってしまったていることにしっかりと及べば、もっとおもしろい小説になっていただろう。例えば福島原発事故や、地震や、情報操作など現代社会は豊かさの裏に吊り天井風の地獄化の恐怖と背中合わせに存立している。吊り天井に仮託して現代社会の負の構造を描き切れば成功していたと思われる。返す返す惜しまれる作品だった。しかしこれをさらに直して、世に問うことは可能なので、挑戦してもらいたい。

まほろば賞も十回を重ね、一つの年輪を得ることができた。感慨を覚える。これからも同人雑誌の中の真摯な創作営為を見届けていきたい。

まほろば賞授賞式・文芸思潮懇親会

二〇一七年一月七日午後一時半より大田区民プラザで行なわれます。どなたでも御参加できます。どうぞ御来席ください。

たら、生きている人間以上に、死者たちの「生きざま」のほうが、現実的なのだろうか。そう、死者は実は私たちと一緒に「生きて」いる。震災以降、我々はそのことにあらためて気づかされたのかもしれないと思った。

武田純子氏が「沈む町」に描くのは霧に閉ざされた心の「異界」だ。「ひきこもり」という現代の悩みを抱える主人公が、引越した先の田舎の家での唯一の役目として散歩に連れ出すチョコという犬は、あたかも、あちら側とこちら側を行き来する船のようである。そのノアの箱舟たる犬に連れられ彼女は霧の海で泳ぐ魚たちを見る。また、ダックスフントを乳母車に載せた老婆に遭遇する。乳母車と老婆あるいは誕生と死という背中合わせのものを運んでいる犬もまた箱舟なのだろう。主人公が心に絡む鎖を解き始めた頃、霧と共に老婆は消える。老婆が告げた「濃い霧の出る日はよく晴れる」という意味の言葉が明るい光を与えつつ静かな波のように引いていくラストが心を打つ素晴らしい短編小説である。

澤つむり氏の「ゲッコウジャポニクス」は、個人的に一番共感し、考えさせられた。恋人との先の見えない関係、支配的な女性上司による職場いじめ、電車に乗ると襲う酷い動悸と言った、不穏な毎日の中、すつと、ふつと家の中に現れるヤモリ。主人公はこのヤモリに幼くして交通事故死した徒弟を重ね、彼の名をつけ、やがて会話までするよ



なかがみ のり
1971 東京生まれ

ハワイ大学美術学部卒業
99『イラワジの赤い花 ミャンマーの旅』（集英社）を上梓
同年『彼女のブレンカ』（集英社）ですばる文学賞受賞
『悪霊』（毎日新聞社）『いつか物語になるまで』（晶文社）『夢の船旅—父中上健次と熊野—』（河出書房新社）『アジア熱』（大田出版）『シャーマンが歌う夜』『水の宴』（集英社）『海の宮』（新潮社）『熊野物語』（平凡社）など著作多数

異界に捕らわれる

中上紀

まほろば賞の選考会への参加は、何度目になるだろうか。毎年、豊かでそして重く切実なものを背負いながら物語を紡ぐ書き手に圧倒されるし、あらゆる意味で刺激を受けるのだが、今年はとりわけ読後に気持ちの高まりが続いたのは、各小説の中で練り広げられる濃密な異界性に捕らわれてしまったせいかもしれない。

津田一孝氏の「送り火の夜」の世界は、死者の居る場所と繋がっている。気づくと、この登場人物も、あの登場人物も、死者であるというどんでん返しは予期しうるものであるにも関わらず、いつの間にか引き込まれる。もしかうになる。「モリオ」との出会いには当然幻想ではあるが、なぜか以来上司の態度が和らぎ、仕事もうまくいき始める。それは「モリオ」の不思議な力故というよりは、「モリオ」との共生により主人公が生き方の座標を自然に別のところに置いたからであろう。ヤモリという、哺乳類ですらない完全なる異種に、美しそのまま逝った徒弟の記憶という神話を下ろしてるところに脱帽するが、もしかしたら、尻尾が切れても再生することが出来（しかも前とは異なる尻尾を）、傷つきながらも何年も生きつづけ、家族を守るヤモリは、下手な哺乳類よりもよほど人間らしいのかもしれない。



読者賞

「花ことば」 多嶋海彦

寸評・感想

●「ゲッコウジャポニクス」は女性編集長の描写が抜群の筆運び。面白くて読ませる作品。まほろば賞候補にいい作品が登場したと思う。 木内是壽

●「花ことば」のきめ細かな鍛えられた文章はすばらしい。奥に鋭さを秘めた小説はもつと読みたくなります。 西田宏明

●「ゲッコウジャポニクス」の着眼の面白さ。「物狂いの石」の借日の雑誌『宝石』の探偵小説を想起させる、一気に読破させる力量に圧倒される想いでした。 廣田瑞子

●「沈む町」は洗練された現代の寓話の趣があつて引き込まれました。今後もうこういう世界を書いていってくださ

い。 ●「送り火の夜」は、救われない魂の彷徨いが、とてもよかったです。こんな小説もあるのだなあと感心しました。

渡辺めぐみ

匿名希望

まほろば賞 読者賞 投票集計

作品名 投票者	ゲッコウジャ ポニクス	花ことば	馬乗り馬頭 観音の里	沈む町	物狂いの石	送り火の夜
日野 求		20				
藤井総子		30				
神通明美	3	1	1	3	1	1
今田真理子	10	10		10	10	10
野原 寿		20				
横山彰範		20				
岡本峰一郎		20				
角田浩一		20				
田村秀児		80				
浜田邦雄		30				
小坂三国		10				
能田多佳子		10				
谷川晃弘		20				
関田忠弘		20				
能田よし子		10				
高田頼孝		20				
笹野徳之進		10				
根本理恵子			50			
伊藤元子			30			
木内是壽	50					
舟坂明雄	20					
石澤幸治		20				
計	83	391	81	13	11	11

まほろば賞は、3年前から読者賞を設けました。読者からの寄付金に加えて感想投票をいただき、その合計点数の最高点の作品に読者賞を贈ります。今回は上記の集計のような得点となりましたので、ここに御報告いたします。寄付金合計金額 57000 円を得票に従って配分し、各著者に贈らせていただきます。おかげさまでお寄せ下さる方も増えて参りました。これが大きく発展し、多数の方が参加して下さることを期待しております。

全国同人雑誌振興会

まほろば賞は文学を愛好する皆様からの御寄付によって成り立っております。志ある方の御支援をお待ちしております。

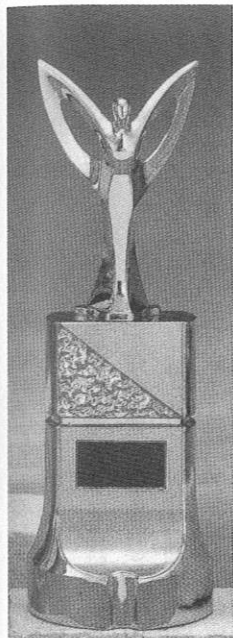
河林満賞の移設コメン

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品はこれまで銀華文学賞に応募される小説作品を対象にしましたが、銀華文学賞の終了によってまほろば賞のなかに組み入れられることになりました。同人雑誌の優秀な作品に贈賞され、受賞者には賞状、賞品、記念品、賞金五万円が授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮





武田純子

たけだ じゅんこ

1978 広島県生まれ
 広島大学を卒業後、会社員を経て結婚
 現在は、広島県内の山と田んぼに囲まれた夫の実家で暮らしている
 「安藝文学」所属
 2012「庄原文芸大賞」受賞
 好きな作家は司馬遼太郎、村上春樹、ガルシア・マルケス、アガサ・クリスティーンなど



澤つむり

さわ つむり

1949 新潟県生まれ
 埼玉県在住
 早稲田大学文学部卒
 2001 友人たちと同人誌「狐火」を創刊
 同誌19号「家族の樹」がまほろば賞優秀賞を受賞

まほろば賞 受賞の言葉 津田一孝

ただ祈るしかない事件を目にすることが多く、京都の風物に触発されて「五山送り火」の題名で書き始めた。京都をどのように描けばいいのか悪戦苦闘し、一度は放り投げてしまったが、舞台を架空の都市に設定し直したら気持ちも軽くなり、完成することができた。

ところで、国家や共同体ではなく、個人の物語を綴るのが小説だと聞いたことがある。いつどこで聞いたのか思い出せないのは、小説を書く誰もがそのような信念を胸に秘めているからだろう。書き始めた者が書き続けなければならない理由もここにある。

前身の同人誌「作家」には「作家賞」「季刊作家」にはかつて「小谷賞」があり、全国から多くの同人誌が送られてきた。これがいかに重要な賞であり、わが師小谷剛が何をなそうとしていたのか、今回の受賞は不肖の弟子の眼をこじ開けてくれた。「まほろば賞」の関係者には深く感謝申し上げたい。



津田一孝

つだ かずたか

1947 年生まれ
 名古屋市出身
 1971 関西学院大学文学部
 仏文科を卒業
 中部経済新聞社入社 経
 済記者となる
 2007 定年退職
 1984 から「作家」（現
 在「季刊作家」）同人

特別賞 受賞の言葉 武田純子

この度は特別賞を頂きまして誠にありがとうございます。まだまだ信じられない気持ちで一杯です。受賞作はウォーキングをしながら見慣れた霧深い風景を眺めるうち、考えつきました。身近で見過ごしがちなものをすくい取ることに大切さを改めて感じます。

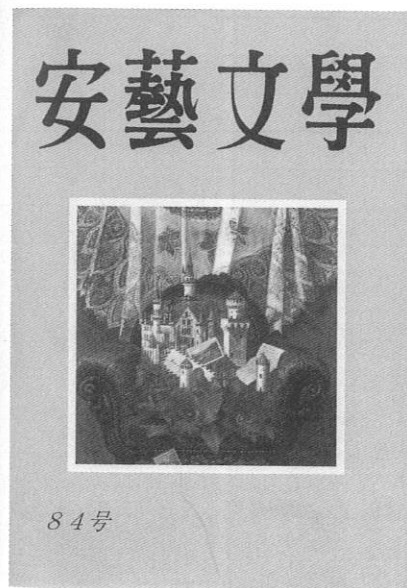
十代の頃は創作がただ楽しくいくらでも書けたのに、二十代になり作品の出来や読者の目を意識するようになった途端、書くことが苦しく筆が進まなくなりました。悩みすぎて体に変調を来し、二度と書くまいと決めたこともあり、それでもいつの間にか再び執筆を始めているのが自分でも不思議でなりません。
 この度は本当にありがとうございます。

河林満賞 受賞の言葉 嶋津治夫

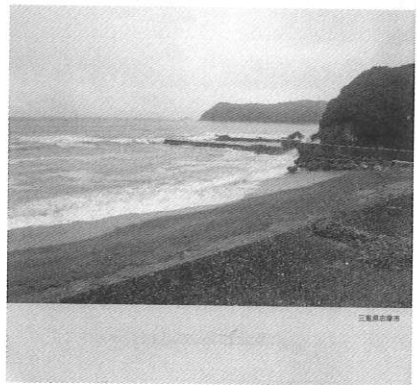
このたびは、「河林満賞」をいただき、大変嬉しく、また恐縮しております。

河林満氏の「渴水」を拝読したのは、もう二十年ほど前ですが、いまだに強く印象に残っております。細部の情景が目につかなくて、五十年の若さで亡くなられたのが、とても残念です。もともと生きて、今の時代を書いてほしかった、読んでみたかったと思います。

翻って私は、同人誌「狐火」に細々と作品を発表しているだけなのですが、同世代の河林氏から今回、大きな温かい励ましをいただいたように思います。
 本当にありがとうございます。



季刊 作家 秋冬号 No. 86



ゲッコウジャポニクス

澤つむり

朝、出勤しようとして玄関で靴を履きかけ、すぐ脇の男物のサンダルの上で蠢いているものに気がついた。

ごく小さいが、手も足もあるし、何より上目遣いにこちらを見ておのぎよつとして、屈みこんでよく見れば、どうやら、ヤモリのようなのだ。それにしても、まだ色も白っぽくて、人の手の小指ほどしかない。ヤモリの子供だろうか。

一体、どこからどうやって入ってきたのか、母親とはぐれた迷子なのか、などと考えている間、チビヤモリはサンダルの踵の辺りでびくとも動かさず、ひたすら私を見つめている。

拓司が履いていたジーンズ地の、親指だけが別になった

サンダルだ。彼が、郷里の福岡で親友のやっている工務店が倒産しかかり、頼まれて立て直す手伝いに行った三月末から、もう三ヶ月も置きっぱなしにしているものだ。一人暮らしのアパートなので、男物の靴とかサンダルとかが玄関にあった方が心強いように思い、片付けずに置いていた。いや、置いておけば、ひよっこり拓司が戻ってくるような気がしたせいだったかもしれない。

ともかく、たたきの端の、下駄箱の脇に出しっぱなしにしていたそのサンダルの、右足の上から私を見上げている。仕方ない、外に出してやろうと手を伸ばし、小さな体を

手のひらのうちに捕まえかけた瞬間、するするっとびっくりするほどの速さで、靴箱の下に隠れてしまった。

あまりの素早さにあっけに取られ、しかし、そこなら逃げられないぞ、と壁の非常用の懐中電灯を取って、照らしながら、出ておいで、と呼んでみた。ところが、作り付けの靴箱なので、隠られるような隙間はないはずなのに、まるで忍者のように消えていた。壁を伝って、裏側の縁に張り付いているのかもしれないと、潜りこむようにして探したが、ついに見つけられなかった。

ふわふわとした一瞬の手ごたえと、脅えたような小さな丸い目が心に残り、餌も探せず、どこかで干からびてしまっているのではないかと、ドアに鍵を掛けながらも気になった。

勤め先の週刊リブ・編集部の始業時間は九時半で、本当はまだ時間があつたし、締切日の毎週木曜日までたいてい週の前半は残業が続くので、九時半始業もあくまで目安だったのだが、半年前、編集長が沼部女史に代わってから、急にあれこれ業務の管理がきつくなっていた。始業時間だけでなく、記事のチェック、取材前後の報告など、それまでのやり方はルーズで非効率だと、矢継ぎ早に改められた。それはとりもなおさず、それまでの編集部員——倉田さんとフミさん、そして私への非難だった。といつても、二十一年近いベテランの倉田さんと十年選手のフミさんの二人は、代理店やクライアントに絶大な信頼を得ているので、女史

の攻撃や厭味はほとんど、入社して四年目と日の浅い私に向けられた。というか、そう自覚する前に、体に変調をきたした。

出勤しようとして電車に乗ると、胸の動悸が激しくなるのだった。

胸が締め付けられるように苦しくて、次の駅で降りるしかなくなり、七駅目の浦和まで、各駅停車の電車で一駅ずつ途中下車していく。ようやく辿り着いても、駅のトイレで蹲り、しばらく呼吸を整えないと歩き出せない。職場は、大通りに面したビルの八階にあるのだが、エレベーターに乗るとまた動悸が始まりそうで、階段で上るしかない。と、こんな状態が一ヶ月ほど続いていた。

漠然と、病院に行かなければいけないと思いつながら、その気力が湧かず、ただ、動悸のせいで通勤に時間がかかって困る、とばかり思っていた。

だが、今朝は、思いがけないヤモリの出現にかかずらつて、いつもより二本も遅い電車になったのだが、浦和駅で降りるまでの間、不思議に胸の苦しさがなかった。

先ほど、手のひらに一瞬乗せたヤモリの感触が残っているせいだろうか。玄関のドアの外に出してやろうとしたのに、彼は——オスカメスかは判然としなが——なぜか脅えた顔でするりと逃げてしまった。ひねりつぶされるとでも思ったのだろうか。

まるで昨日の私のようだった、と、ヤモリの、飛び出し
そんな目を思い浮かべる。

毎週月曜日の朝は、その週の担当記事の割り振りがホワイ
トボードに書かれるのだが、昨日、私の欄にはどうとう、
ペイドもの（記事型広告）がなくなっていた。雑報と、読
者欄・譲りませすコーナーの整理、としか書かれていなかった。
沼部女史の矛先が自分に自分の喉元まで来た、と愕然
とした。

半年前、編集長が代わってから締め付けが始まったとは
いえ、最初の頃は、私が何かという相談役にされていた。
おそらく、年齢が近いせいだったのだろう。女史は、私よ
り二歳年上の三十八歳で、フミさんも、女史より一歳年上
なだけだが、中途入社の人よりキャリアが長いし、倉田
さんは、キャリアはもちろんだが、年齢も女史より一回
り近く上だ。だから、この地区の特徴についてとか、どん
な記事のレスポンスがよいのか、主なクライアントの構成、
カルチャー教室の受講者について等など、転動したての女
史の質問は、ほとんど私に向けられていた。もともと編集
部員は二年契約の準社員なので、正社員の女史にとっては、
ベテランの部員ほど使いくいのだろう。そして三カ月
経ったこの四月に、新たに編集部員の募集をし、二人の新
人——藤谷さんと久美さんが入ってくると、今度は私を遠
ざけ、疎んじ始めたのだ。

上げます、譲ります、譲ってください」の担当なのだ。私
以外の人が机に向かって原稿を書き、代理店の営業マンと
クライアントの許へ出かけ、記事の打ち合わせをする、と
いった仕事をしている脇で、未使用のギターを譲りたいと
か、かわいい子猫をあげたい、などと読者からかかってくる
電話の応対をする。これまでは、手の空いている人が適
宜電話を取って済ませていた仕事を、わざわざ「担当」と
書かれたのだ。それと、リブが主宰するカルチャー教室の
受講を受け付ける係、つまり電話番号になったのだった。

今朝もまた癖で、部屋に入るとまず、正面のホワイトボー
ドへ目が行ってしまう。もちろん何も変わっていない。

自分の席に向かう途中で、フミさんと目があつた。気遣
うような眼差しに、平気、というような首の振り方をし、
大げさに肩まですくめてみせた。だが、目の前の机にする
べき仕事がないのには、さすがにいたたまれない気がした。
代理店の担当営業マンと取材の打ち合わせをする必要もな
いし、過去の記事や資料を調べる必要もない。雑報は、沼
部女史の指示で、季節に合わせた話題を拾うのだが、それ
は紙面の調整後の仕事となるので、せいぜい水曜午後から
しか動けない。それまでは、読者が、譲りますコーナーに
掛けてくる電話を待つだけだ。といって、先週までのよう
に、女史に執拗に記事の書き直しを命じられるのも、もう
たくさんだ、という気もする。そんな及び腰じゃパンチが

きめ細かい紙面づくりのために、どうしてもあと二人編
集部員を採用したい、と女史が本部長に頼んでいるのが聞
こえてきたとき——おそらく私たちに聞こえるように言っ
たのだろうが——そうなら、この狭い部屋はどこにあ
と二台の机を置くのだろう、とほんやり思い、ああ、私が
お払い箱になるのだ、と気がついた。女史にとっては、自
分が面接し、採用した新人たちの方が扱いやすいに決まっ
ている。フリーペーパーの週刊リブの記事は、三十代から
四十代前半までの女性向けの情報が主なので、やはり同じ
世代か少し若い世代が書くのが一番なのだ、とわざわざ口
に出すときもある。だから、倉田さんもフミさんも、机
の前にうずたかく資料を置き、女史から身を隠すようにし
て原稿を書く。雑談などめつたにしなくなつた。だが私
は、女史の斜め前の席で隠れようがないし、そそっかしい
質なので、しばしば女史の逆鱗に触れる。新人の藤谷さん
（三十二歳）と久美さん（二十八歳）を教育するにも、私
を叩くのが早道なのだろう。

昨日、ホワイトボードの担当表を見たときには、とうて
いそこまで冷静にはなれなかった。

自分が必ず担当してきた「瘦身クラブ・ミューズ」の項に、
久美さんの名前を見つけ、唾然とした。それまで三年近く
担当していた学習塾「エル」の月例コラムも、やはり新人
の藤谷さんになっていた。その代わりに、私は「不用品を
足らないでしよう、と突き返されたかと思うと、そんなふ
うに断定して押し付けられたら、読者の反発を買うだけじゃな
いの、と手厳しく言われるのだった。

沼部編集長の視線を感じるだけで、体がこわばり、息苦
しくなっていた。おそらく、あと一週間、あんな状態が続
いたら、胸の動悸どころではなく、出社できなくなつたに
違いない。

あのチビヤモリの、ふんわりした感触を思い浮かべ、吹
きだまりに追いやられた、という思いをこらえる。

女史が、「瘦身クラブ・ミューズ」の担当に抜擢した久
美さんを自席に呼び、アドバイスをする声が聞こえてくる。
「マンネリが一番いけないの。以前の記事に寄りかかって、
いつも同じ切り口じゃ、能がなさ過ぎるでしょう」

よく通るアルトの声が、しんとした室内に響く。
「だからって、ちようちん記事はもつてのほかよ。あくま
でも読者の目線で、正確な情報を的確に伝えなくちゃ。疑
問は曖昧にしないで、確かめるぐらいの見識を持って。営
業の言いなりになるような、下請け気分は「法度よ」

よほどほんやりしていたらしい。女史の、「はい、今係
りの者に代わりますので、少々お待ちください」と言う声
で、気がついた。榎さん、と言う女史の声にあわてて、転
送された目の前の受話器をとると、

「譲りますコーナーを、読んだだけじゃ」という若い

女の、鼻にかかった声が聞こえてきた。

「はい、あ、あの、何か」

「だからサー、ベビーベッド三千円って書いてあるじゃん。で、それ、運送費はどうなるのかって。おんなじこと何度も言わせないでよ、もう」

「あ、あの、それは……、そうですね」

まごまごしていると、脇からさっと受話器を奪い取られた。

「あら、すみません。ちよっと手が離せなかったもので、お待たせしちゃって。ええそうですね、その件につきましましては」

立ったまま、てきぱきと話す女史の声が辺りに響き、右奥の営業部の方からも、事務のパートの女性がこちらを窺っている。

女史が電話口で、相手の女性を宥める声が続く。受付係り——私である——の対応のまですで、大変ご迷惑をお掛けしましたと、終始低姿勢である。

私のすぐ前に、振り下ろすように受話器が戻された途端、「あなたねえ、読者の気持になって考えたことないの。電話をすぐ取らないで、三回も鳴らさせちゃ、失礼でしょう」

「はい」

「編集長、そろそろ出かける時間なので」

取材の注意を受けていた久美さんが、そう言って出てい

る、十一時半までに行けそうにないんで」と言う。

「あ、それ、担当、私じゃないの、久美さん。もう出かけたわ」

声を潜めたつもりなのに、耳ざとく女史が聞きつけてしまった。

誰、池田さんなの、と言われ、仕方なく頷くと、ちよっと電話を回して、と有無をいわさぬ調子で告げられる。

「はい、あの、編集長に代わります」と、無理やり保留のボタンを押す。

「沼部ですが、取材の時間は絶対に守っていただかないと困ります。こちらも秒単位のスケジュールで動いているんですから。担当？ 須藤久美です。とても優秀な人ですから。ええ、十一時半前には必ず先方に着くと思います、よろしく」

と、一方的に言って電話を切ると、早速私に、

「榎さん、取材のアポは厳守ですから、甘く見られるような応答は慎んでください」と、ダメ押しをするように声を高めた。

「はい」

私は、今日始めて女史の顔を見上げて——それまでずっと俯いていた——顔をじっと見て、見つめて、見続けて……、どうやら、かなり長い間、ひたすら女史の顔を見ていたらしい。

こうとし、女史が私の机の上に、電話してきた女性のメモを置き、彼女を見送るように戻っていった。で私は、女史の、筆圧の強い、達筆のメモを見ながら、「譲りますコーナー」の始末をし始め、それにしても先ほど、電話のベルがまったく聞こえなかったのが、どうしてなのかと不思議で、女史の叱責がいつもほど気にならなかった。まるで自分だけが、異次元ポケットに落ち込んでしまったような、不可解な、それでいて、妙にふてぶてしい思いがあった。

また電話が鳴った。今度は、一度目が鳴り終わらないうちに素早く受話器を取った。

「お電話ありがとうございます。週刊リブ・埼玉地区・編集部の榎麻子でございます」

女史が復活させたマニュアルの通りに一息で言うのと、

「なあに、新人の美人さんじゃなかったの、がっかり」という間延びした池田の声が聞こえてきた。

代理店・アド広の係長で、かつて拓司が一番親しくしていた同僚である。そもそも私が拓司と知り合ったのは、彼の紹介であった。だから、私にとっても気のおけない友人なのだが、今はそんな場合ではない。

「あー、あの、ご用件は」

女史の鋭い眼差しを感じ、しゃちほこばった声で答える

と、

「ミュージズの取材なんだけど、ちよっと時間ずらしてくれ
「何よあなた、私の顔に何か付いてるっていうの」
悲鳴のような女史の声に、え？ とようやく我に返った

のだが、

「あなた、失礼じゃない、何なの一体」

と、女史の顔が赤らんで、しかし、私への小言はそれきり飲み込むように顔を背けた。そして、わざとのような咳払いを一つすると、フミさんの方へ体を向け変え、

「午後から本社で編集長会議ですから、お昼食べてそのまま行きます」と伝え、そそくさと席を立ったのだ。フミさんが、お帰りは、と背中を掛けると、「社長との懇親会に出て、直帰します」と、後ろ向きのまま答え、床に靴音を響かせながら、足早に部屋を出ていってしまった。

女史の靴音が完全に消えると、編集部がゆるく動き出すような気がした。

しばらくしてフミさんが、お茶入れたから、と私の机の端に湯飲み茶碗を置いて、お昼どうするの、と言った。ああ、先に行って、取材あるんでしょう？ 午後、と言うと、そうだけど、と、まだ何か言いたそうにしている。倉田さんと藤谷さんに聞かれて、まずいということもないが、出ていったばかりの女史の悪口を言うのも大人げない気がしたので、だいじょうぶ、昨日はちよっと参ったけど、今日はもう慣れたっていうか、と小声で答えた。するとフミさんが、うん、さつき見ていて感心しちゃったわ、と囁いた

のだ。

「え、さっきって」

「すごいならめっこだったじゃない。びっくりしたわ。あなたって、見掛けによらず、けっこう凶太いとこあるのね」

「言い、じゃ、私先に食事に行ってくるわね、と笑顔のまま出ていったのだ。」

「ならめっこ、と言われた私はわけがわからず、しばらくして、ああ、と気がついた。女史に叱責されたとき、思わず顔を見て、しげしげと見て、なぜかじつと、女史の顔を見続けてしまったのを、ならめっこと言われたらしい。」

それは実のところ、女史の目許が、今朝の、チビヤモリの目に似ているようで、おやつと、見直してしまつたせいなのだが、ただ、その途端、そういえば、女史の方がかえってそそくさと逃げていった、と思ひ返し、妙な、と思つた。

女史の容姿が、あのヤモリに似ているわけではなかつた。スラリとした長身で、背筋が反り返るほど姿勢がよい。でも、目許は案外可愛らしい、と先ほどはじめて気がついた。そう、ヤモリの目にとことなく似ている、と思つた瞬間、女史が恐くなくなつたのかもしれない。意外に骨ばつた後姿に、あのヤモリが、一目散に下駄箱の下に逃げ込んだ姿が重なつていった。

一人の夕食なので、出来合いの惣菜パックばかり駅前

着替えて、買ってきた惣菜を電子レンジで温め、朝タイマーでセットしておいたご飯をよそい、夕食を食べ始めた。期待して買った「揚げ出し豆腐」も「大根とレンコンのぱりぱりサラダ」も、味が濃すぎたり、脂っこかつたりで、いまひとつである。ご飯だけが炊き立てで美味しい。

まあ一人の夕食はこんなもの、と思つた途端、いいなあ、僕も腹ペコなのに、と声が降つてきた。

見上げると、白い壁と天井との境の木枠の縁に、逆立ちするような格好で「彼」がいた。

あんなところによく張り付いていられるものだ、と半ばあきれ、半ば感心して見とれていると、十分な距離があるからと安心したのか、「彼」の方もこちらを見下ろしながら、頭を掻くようなしぐさをする。

「腹ペコって、でも、餌とかよくわからないけど、どうしたらいいの」と、声を出してみた。

「ここにあるような食べ物じゃ、口に合わないのかしら」食卓の上の皿を見ながら言うと、待つてました、とばかりに、壁の隅を素早い動作で垂直に降りてきて、「うーん、そんなものは苦手なあ。やっぱり、生きた虫とか、蚊とかじゃないと」

「好き嫌いを言つて、だから痩せっぽちなね。いいわ、窓を開けてあげるから、出ていきなさい」

「え、いやだよ。僕のうちはここって、決めたんだから。」

スーパーで買ってしまふ。それでも、切らしていた調味料や果物、卵などで手提げ袋が重く、家に帰り着くとほつとした。

玄関ドアの鍵を開け、誰もいないとわかっているのに、ついついものように、ただいま、と言つてしまった。すると、お帰り、と、かすれた声が聞こえたのだ。

はつと身がすくみ、思わず荷物をたたきに落としてしまった。

気を鎮めながら、壁際の電気のスイッチをつける。ドアの内側から玄関、リビングへの廊下がぱつと明るくなり、だが、もちろん誰もいない。

自分を励ますように、誰、拓司なの、と震え声を出すと、ごめん、脅かしちゃつて、でも待つてたんだ、へへ、と照れ臭そうな声が、斜め上から聞こえてきた。

息を詰め、目をそちらに向けると、てへ、こんなに明るくちゃ、眩しいよ、と甘えた声で続ける。

ああ、とようやく息を吐き、私は下駄箱の斜め上の、明かりが届かない天井の隅に張り付いている「彼」を確認した。今頃まで隠れていたなんて、と内心では驚いたのだがそのまま知らん顔で、たたきに落としてしまったスーパーの袋を拾い、どうやらバック入りの卵は幾つか割れたようだったが、「彼」の方へは目を向けず、まっすぐリビングへ向かつた。

ああそうだ、窓はしばらく開けといて。そうしたら、蚊とかハエとか入ってくるから」

「それは困るわ。蚊に刺されたら大変」

「ふん、そうやって何でも締め出すから、だめなんだよ。開けてごらん、風がきつと気持ちいいよ」

「注文が多いのね」

しぶしぶ流しの前の窓を開ける。一人暮らしになつてから、アパートの三階とはいえ無用心な気がして、どの窓も締め切つたままではいたが、この窓ならアルミの格子が外枠に入つていない。

網戸にしようとする、だめだめ、網戸があつたんじゃない、虫が中に入れないから、とまた指図する。

「わかつたから、その代わり、すぐ閉めるわよ」

思いがけないほど涼しい風が入つてきて、まんざらでもない。それに、斜め上の夜空に、満月があつた。

「ほおら満月じゃないか。いいぞいいぞ、満月やーい」

「杜夫、杜夫なの、君？」

彼の声に、ふいに何十年も前の記憶が蘇つた。

小学五年生だった夏休みだ。

海辺の祖母の家で、従弟の杜夫と遊んでいた。夕方遅くまで岩場で貝や蟹をとつていて、急に暗くなったのにあわてて家に帰ろうとした。杜夫は小学二年生だったが、それまでずっとイギリスで暮らして、海で泳いだことがな

く、水を怖がっていた。それが、お転婆だった私に引きづられ、ようやく一緒に岩場で遊びだしたのだった。

暗くなった帰り道に杜夫が怯え、泣きそうな声を出した。それを聞いた私は、本当は自分も不安だったのに、意地悪をしたくなり、いきなり走り出した。弱虫の杜夫が追いつけないぐらいの早足で、砂浜を駆け出したのだ。

しばらくして息が苦しくなり、後ろにいる杜夫を振り返ったら、いなかった。どこかで転んで泣いているのだろうと思いい、杜夫と呼んだ。だが何の返事も無い。どうしたのかと急に心配になり、走ってきた道を戻りながら、何度か、杜夫と呼んだ。しかし返事はなかった。姿も見えない。仕方なく砂に足を取られながら岩場の近くまで戻った。だが、そこにも杜夫はいなかった。心配と後悔とで声を限りに叫んでも、ますます暗くなっていく夜空に、木霊になった私の声が吸い込まれていくだけだった。どうしよう、と泣きたくなって、何気なく砂浜の奥の松林を見ると、林の斜め上の空に、びっくりするほど大きな満月が昇ってきた。そして、その光が砂山を照らし始めると、山の頂上に、満月を見上げている杜夫の、小さな背中が見えたのだ。杜夫は、魅入られたように満月を見ていた。華奢な細い首を仰向けた格好で、身じろぎもしないで見つめていた。

だが、杜夫と遊んだのは、その日が最後だった。翌朝早く、まだ私が寝ているうちに、迎えに来た叔母と東京へ帰っ

てしまったからだ。そして翌年春、杜夫は交通事故に遭って死んだ――。

「僕の名前は、杜夫じゃなくて、モリオなんだけど、そう呼びたければ呼んでもいいよ」

すぐ近くでそう言われ、振り返ると、いつの間にか彼が――モリオと呼ぼう――ガスレンジの脇の、水色のタイルに張り付き、上目遣いで私を見ていた。

「そんなつるつるしたところに、よくとまってるわね」と、感心して言うと、

「天井に逆さにだってとまれるさ。壁チヨロなんてばかにされるけど、ヤモリはね、家守^{カモリ}って漢字で書くから、家の守り神だって、昔はどこでも大事にされたんだ」

と、少し顎を突き出し、博識振りをひけらかすふうに答えた。

「家を守る、でヤモリねえ。じゃ、どうしてこんなところに来たの。普通は、古めかしいお屋敷とか大きな農家とかにいそうなのに。ここはちっぽけなアパートだし、守ってほしい家族なんて私にはいないのに」

「結婚してないの？ 拓司って人のサンダルが、玄関に置いてあるじゃない」

「彼は、アド広を辞めて福岡に帰ったわ。幼馴染のやっている工務店が倒産しかかって、頼み込まれたから仕方がないんだ、なんて言ったけど。幼馴染って、女の人なのよ、

で押さえつけ、格闘している。

小さな蚊だ、と思ったとき、彼が口の奥に飲み込んでいた。しばらくもぐもぐと口を動かしていたモリオが、こちらの視線に気づいたのか、顔を仰向け、へへ、ご馳走様でした、と言って、長い舌でべろりと口のまわりを拭いた。

「満腹になったの？」

「ああ大満足だ。何だか、急に眠くなってきた。僕、もう寝るから」

「あら、どこで寝るの？」

「どこって、気に入った場所さ。天井の隙間にしようかな」

「あ、奥の部屋はだめよ。私が寝るベッドの真上は、絶対だめ」

「どうして？」

「拓司が言ってたわ。天井からヤモリが垂らしたおしっこが目に入ると、目が潰れるって。南の島でバンガローに泊った友人が、現地の人にそう教えられたって」

「ばか言え。ヤモリはおしっこなんてしないし、毒なんてない。そんな南の島の迷信だ。ていうか、目を開けていちゃいけないって言われたんだろ。人間の男って狡いから、女の人に目をつぶらせるために、平気で嘘をつくんだ。君だって、本気になんてしなかったくせに」

「そりゃあ」

きまり悪くて私が俯くと、モリオは図に乗ってか、長い

絶対。だから、もうここには戻ってこないわ」

「どうして？ 君がいじめたんじゃないの？」

「え？」

「昔からいじめっ子だったじゃないか。僕が、何時間もかかって作った宇宙ロケットを、めちゃめちゃに壊した」

モリオの言葉に、祖母の家の二階の、日に焼けた畳の座敷が思い浮かんだ。

「それ、ブロックピースで杜夫が作ったもののこと？」

「そうさ、運転席や外扉やエンジンルームや切り離し装置まで作って、最高に格好良くできたロケットだったのに、君がばらばらに壊して、部屋中にブロックを蹴散らした」

「違うわそれは……、何かで喧嘩したからよ」

「何かって、君が癩癩^{かたかた}を起こして、乱暴したんだらう」

「そうじゃないわ、そうじゃなくって……」

思い出せないまま、私は窓の外の満月を見上げた。先ほどよりさらに高くなり、色も、青みがあった黄色に変わっている。

杜夫が、これは一人乗りのロケットなんだ、なんて言うんだもの。それじゃ一緒に乗れないじゃないの、だから……。

後ろで騒ぐ気配に、感傷的な気分が消えて、振り返ると、モリオが、アルミサッシの窓の棧に足を掛け、口に何か銜えていた。もがいて逃げ出そうとするものを、しきりに手

舌で、自分の目を何度も拭うしぐさをする。

「だけど、今日は廊下で寝る。あそこの方が涼しいからじゃ、お休み」

モリオは、朝消えたときと同じような逃げ足の速さで、瞬く間に消えてしまった。

私はもう一度、窓の外に目を向けた。あの日、杜夫と、満月だ、いや違う、あと一日経たないと満月じゃないよ、などと、どうでもいいことを言い争ったのが思い出された。

ふと、従弟の杜夫は、生きていたら何歳だろうと思った。三歳下ということは、三十三歳のはずで、すると、私の中にある杜夫の面影は、八歳のあのときのままなのに、本当は、拓司と同じ年なのだと、とても不思議な気がした。

モリオは寝坊な質らしい。私があわただしく身支度を整え、簡単な朝食をとり、玄関を出ていこうとしても、彼は現れなかった。だが、ドアを閉めようとすると、どこからか、行つてらっしゃい、という声が聞こえてきた。で、ドアをもう一度少しだけ開けて覗くと、廊下の角の、ドラセナの植木鉢の株の間から、顔だけ出した彼が、行つてらっしゃい、車に気をつけてね、と言った。眠そうな顔で、それだけ言うと、ごめん、僕もう少し寝る、と顔を引つ込めてしまった。うん、行つてくるから、と、私はそつとドアを閉めた。

電車に乗っても、あの胸苦しい動悸は起こらなかった。

どこかの駅でポイントが故障した影響とかで、車内はひどく混んでいた。少し走るとすぐ止まってしまい、信号待ちの状態ではしばらく停止します、と車内アナウンスが繰り返す。具合が悪くなったのか、脇に立っていた若い女性がしゃがみこみ、前の座席の男性が席を替わってやった。混んだ車内の蒸れた臭いがきつくなってきた。

席を替わってもらった女性は、まだ気分が治らないのか、じつと俯いている。もし一昨日、電車がこんな状態になっていたら、私もきっとしゃがんでしまっただろう。

行つてらっしゃい気をつけてね、か。あんな短い会話のおかげで今自分が平気でいられる、とまでは思わなかったが、何か、少しだけだが、自分の体にゆとりがあるような気がした。

ようやく浦和駅に着いた。すでに始業の九時半を過ぎていた。だが、電車が遅れたせいなのだから仕方ないわ、と私は、いつもと同じペースで歩いて事務所向かった。

大通りの、事務所まで二つ渡る交差点の一つ目の信号が、黄色に変わりかけた。と、後ろからすごい勢いで駆けてきた人に突き飛ばされそうになった。振り向いて見ると、沼部女史だった。彼女の方は私に気づかず、しかも赤になった信号を無視し、突っ切っていた。左折してきたバイクが寸前のところで止まったが、見るからに危なかった。し

かも次の信号が赤に変わったので、結局、立ち止まることになった。私は青信号になってから渡り、そのまま行く」と女史に追いついてしまいそうで、一瞬足踏みしようかと迷ったが、何なのだろう、自分ではないような、つまり沼部女史にずっと怯えていた自分ではないような大きな声で、お早うございます、と後ろから声を掛けていた。

びくっと女史の背中が震え、こちらを振り返り、私だと気づくと、電車、ひどく遅れたわね、と言った。何となくその声に元気がなく、昨日までの、私を叱ったり、営業部長に高飛車に文句を言ったりしていた様子と、違っていた。視線も俯きがちで、心ここにあらずといったふうに見える。

信号が変わって歩き始めると、さすがに大腿で歩き、たちまち私は置いていかれたのだが、そうであっても、どことなく背中が前かがみになっているような気がした。すると、事務所のあるビルの、エレベーターのボタンを押し、扉が開くと、驚いたことに、後ろから来る私を待つように、そのまま立っていたのだ。それで私も小走りになって、すみません、と女史に続いて乗り込んだ。

二人だけで、すぐエレベーターが上昇し始め、と、例の動悸が起こりかけた。ずっと階段しか使えないほど恐れていた狭い箱の中に、この症状の元凶ともいえるべき女史と二人きりで乗っている、と体が敏感に反応したのかもしれない。だが、運よくというべきか、ノンストップで八階まで

昇り、さつと扉が開いたので、どうにか寸前で動悸は治まった。

どうぞ、と女史を先に通し、その後ろから行く。編集部へ入っていくと、フミさんがあれっという顔で私を見た。女史と一緒に入ってきたのが、信じられないという表情である。

今日は、この本部全体の合同会議を午前中にするとかで、私たちが揃ったとわかると本部長が、会議室で始めます、と言った。

営業部と編集部と、合わせると十数人になる皆がぞろぞろと会議室に移動し、会議が始まった。議題は、この事務所の移転についてである。

このビルは、下の階に系列の新聞社の支局が入っており、その関係で当初、リブの地区本部が置かれたという歴史があるのだが、もともと古いビルで、手狭となり、女性層にアピールしたいリブの拠点としては、相応しくない。もっと明るく、楽しいイベントや多彩な講座を開けるような、駅に近い、魅力あるファッションビルに移転する方がいいと思われる、などといった本部長の説明とともに、移転候補地が示された。

私は、通勤が遠くならなければ、事務所の場所はどこでもいいぐらいのいい加減な気持ちで聞いていて、本部長のもつたりした口調にうたた寝しそうになった。モリオがド

アの隙間に頭を突っ込んで戻れない、と騒いでいるのに手を貸そう、とした拍子に、目が覚め、フミさんにしーっ、とたしなめられた。

女史が、本部長案に反対していたのだ。まさか、と信じられなかった。そもそもこの事務所の移転を言い出したのは、女史であったのだ。

フミさんにどうして、とジェスチャーでたずねると、彼女も小声で、驚いたわ、寝耳に水、と答える。

女史が、本部長の示した移転候補地について——その場所とビルの写真、周辺の状況がホワイトボードに張り出されていた——賛成できません、と言っている。女史の発言に室内がざわついた。

「移転を言い出したのは、沼部編集長、あなたでしょう」という本部長の声が、かすかに震えている。もうすぐ定年を迎える温厚な紳士である彼が、こんな慥然とした表情を露わにするのは珍しい。

「僕は、このビルに愛着がある。何しろ駆け出しの新聞記者時代の古巣なんだから。それを、あなたが真つ向否定した。古くて、薄暗くて、狭苦しいと。それで、駅前の、できるだけ女性の読者が好みそうな、新築のビルを探しまわった。高い賃料を何度も交渉し、どうにか値引きも承諾させた」

「わかっております、本部長のご苦労には頭が下がります。

何が何でも本社の意向だと突っぱねて。今になってぐらつくとは。どういふことか、わかるように説明してください」

本部長の険しい声に、誰もが下を向いてしまった。女史の言葉を、皆が固唾をのんで待つ。ずいぶん長い沈黙のあとだった。

「あのう、新しい場所に移るといふのは、そこに自分たちも移るといふことで。そこで、毎日仕事をするということ。そうすると、自分たちの本拠地として、毎日の仕事場として、このビルよりも本当にいい場所なのか、それをもう少し本気で考えたいと思って」

「そんなの当たり前でしょう」と、営業部長がたまりかねたように口を挟んだ。

「営業サイドから言わせてもらいますが、大宮駅・東口二分の新築ビル。これが本命だと思います。顧客の利便性、アップグレード、イベントの集客力、すべて一番です。リプが脱皮するためには、活気のある場所で、思い切ったスタイルを変え、はつらつとした若さを見せるのが大事だと思う。尻尾なんて、切られたって、またすぐ生えるもんでしょう」

はつとして私は部長の、ゴルフ焼けした顔を見てしまった。

「いや、トカゲなら、尻尾はまたすぐに生えてくるので。心配いらんでしょう」

仰るとおり、女性が買物のついでに入りたくなるような、しゃれた、明るい雰囲気のところは事務所があったら、イベントや講座を開くにも都合がいい、そうでなければいけない、と思っておりました。でも……」

「でも、何だね」

「いえ、そうなんですけど、今もその考えは基本的には変わらないのですが。何というか、尻尾を切られたら、もう元に戻れないような、そんな」

女史はそこまで言うとき急に口ごもってしまった、あとを続けられなくなった。

「尻尾を切られるって、つまり、空に揚がった風が、尻尾が千切れると、くるくる回って地面に落ちてしまう、そういう意味なの？ 弱小新聞が母体だったリプが、ここまで大きくなった。もうこの辺で脱皮して、新しい力強いリプの姿を示すんだと、それがあなたの口癖だったのに」

「そうかもしれません。昨日、本社の編集長会議でも、古い殻を脱ぎ捨てると、社長のお話がありました」

「じゃあ、何だってあなたは」

「いえ、だから、脱皮するのはとても大事ですが、でも、それには、慎重に、色んな条件を吟味しないとイケないと思うんです。やみくもに、移転さえすればいいとは思えないのです。いえ、そのことに気がついたのです」

「それは、僕が再三あなたに言った言葉でしょう。それを、

部長の補足の言葉に、営業主任の神林たちが声を揃えて笑い、部屋の雰囲気や和らいだが、女史だけは、なぜか青ざめた固い顔のまま、昨日までの突っ張った印象と、著しく違って見えた。

本部長が、移転候補地についてそれぞれ考えてきてほしいと締めくくり、会議は終わったが、編集部に戻りながら私は、たぶんフミさんたちもそうだったと思うが、女史の変化が、どうにもわけがわからない、という気持だった。もつとも、あんなふうに前言を取り消したり、うるたえたり、口ごもったり、戸惑ったりした女史に対して、あきれたという感じではなく、むしろ、案外率直な、憎めないところもあるんじゃない、というふうで、そんな共感めいたものが皆の胸のうちに湧いたせいで、昼過ぎからの編集部が少し違うものになったのかと思う。

そのきっかけが、またしても尻尾を切る話で、しかも風でもトカゲでもなく、ヤモリだったのには驚いたが、フミさんがこんな話をしたのだった。

「トカゲの尻尾は何度でも生えてくるっていうけど、私の実家の方では——フミさんは秋田の生まれだ——ヤモリも、トカゲとおなじで尻尾が生えてくるってあって、子供の頃、よく脅かして、ヤモリが尻尾を落として逃げ出すのを見たわ。だけど、生えてきた尻尾は前とまったく同じってわけじゃないの、少し色が違って。だから生えてきた尻

尾だと思分けが付くだけだ」

三時すぎ、お茶と菓子で一息入れているときだった。こんなふうには女史がいるのに、机を囲んで雑談をするのは珍しかった。女史が編集長で来てから、皆無だったかもしれない。声を出せないようなびりびりした雰囲気、雑談など始めたら、何か皮肉を言われ、余分な仕事を言いつけられそうで、とにかく下を向いて仕事をしている振りが続いていたのだ。それなのに、フミさんが、ヤモリの尻尾の話をして、私は彼女と一番親しくしていたがまだモリオの話はしていなかったのだ、びっくりしてしまった。話を聞きながら、モリオの尻尾はどんなふうだったろうと考え、彼はまだ子供だから、生まれたままの尻尾なのだろうか、などと思った。と、女史が、

「尻尾って、何度でも生え変わるのかしら」と言ったのだ。え？ と、おそらく編集部の全員が耳をそばだてたはずだ。女史が雑談に加わるなど……。

「あの、トカゲの尻尾ですか」と、フミさんが彼女らしい落ち着いた声で言う、

「いえ、そのヤモリよ。前と違う尻尾が生えてきて、もしまた切れたら、次はどうなるのかしら」

「さあ、また違う色の尻尾が生えるんだと思うけど。おばあちゃんには、ヤモリをいじめるもんじゃない、あれは家の守り神だって、よく叱られたわ」

「古い家には、色んな言伝えとかあるものよね。そういうのって、結構、当たっているのかしら」と、かすれた声で呟いたのだ。

「祖母には、座敷わらしも、だいだらぼっちも、井戸神様も、もちろんヤモリもそうだけど、みんな、その家その家で、顔も形も声も違うもんだから、粗末にすると、罰が当たるみたいなこと、よく言われましたけど」と、フミさんが言う、

「粗末にするって、たとえば、居場所を塞いでしまおうとかってことなの？」と、女史がさらにたずねる。

「どうなのかしら。座敷わらしが、畳の縁の間から顔が出せなくなるから、畳に絨毯を敷き詰めちゃいけないとか、井戸を埋めて水道にすると、井戸神様が怒って、その家に祟るとか」

「じゃあ、もしも、古い家を壊してそこをビルに建て替えたなら、そういうものたちの行き場がなくなっちゃうのかしら」

「まあ、そうなんでしょうけど。でも、隙間風がすーすー入る家だと、座敷わらしってひどい寒がりだから、文句ばかり言ってる家にいたずらするらしいですよ」

「そういえば、ヤモリも寒がりなのでしょうか、たいいてい、夏の夕暮れとか、暑い頃に見かけましたね」と、藤谷さんも口を挟んだ。

「そうそう、私の田舎でもこんな話があるわ」と、倉田さんが言った。彼女は愛媛県の出身だ。

「古くなった家の板壁の修理をしようとして、その板をはずしたら、板の後ろに、体を釘で刺し通されたヤモリがいて、それが、まだ釘の周りをぐるぐる回って生きていたのだ、大騒ぎになったっていうの。その釘を打ったのは、五年前だとか六年前だとか、ひよっとしたら二十年前とかいう説もあるんだけど、とにかく何年も前だったので、じゃあそのときからずっとこの格好で生きていたのかって。それで、みんなで板の周りをよくよく調べたら、ヤモリが通っていた跡があるのが見つかった。どうやら、メスのヤモリがこのオスヤモリに餌を運び続けていたんだらうとなって、ヤモリの釘を抜いてやったら、こそこそと、たちまち逃げて見えなくなっていたっていうの。ヤモリ夫婦の愛情物語なの」

美声の倉田さんがしつとりと語る昔話に、皆が聞き惚れ、私も、モリオについて話したいような、しかし、彼のために言わない方がいいのかもしれないと思つて口をつぐむような、こそばゆい気持がした。

何とはなしに女史を見ると、彼女の顔がひどく汗ばんでいるのに、おやつと思つた。エアコンがきいている室内は涼しく、冷え性の私は膝掛けをしているほどなのに、どうしたのだらう、と気になった。すると女史が、

私は結局、皆の話聞いてるばかりだったが、こんなふうには女史を交えての雑談で、しかもヤモリの話が続き、何ともいえない気持だった。

その日、女史からの叱責は一度もなく、かえって夕方、譲りますコーナーへの申し込みの電話が次々に掛かってくると、女史が電話の受付を分担してくれた。

そんなわけで、一つ風向きが変わると、状況が変わってくるとでもいうのか、久々に編集部に和やかな雰囲気生まれ、時間の経つのがとても早く感じられた。

気分がいいと、一人の夕食でもきちんと作る気になるものらしい。このところ出来合いの惣菜で間に合わせていた私も、今日のご馳走を、といつても家で調理をするごく普通の夕食なのだが、舌平目をムニエルにし、海鮮ふうの和え物や、澄し汁を作った。それだけで八時近くになってしまったが、やはり買ったものより断然美味しい。

「今日はご機嫌だね」

いつもの壁の縁の方から声がした。帰ってきてすぐ、流しの前の窓は開けておいたのだが、モリオはちゃんと食べたのかな、と見上げると、

「だいじょうぶ、僕は一足先に満腹だから」と言う。こちらの考えていることがわかるらしい。と、澄ました声で、「君のことは何でもお見通し。機嫌がいいのは、あの女

史と平穩無事に過ごせたからでしょう」と、生意気な口振りで言う。

「それまで知ってるの？」

「僕たちって、視力がものすごくいいから。でも、僕のことを秘密にしたのは正解だ、そのほうがいい」

「どうして？」

「あっちには、イモリが絡んでるからさ」

「あっちって？」

「つまり、沼部の一族さ。あそこの家、建て直す話、それとなくしたでしょ。あの辺り、古い家がほとんどビルになってるんだ。高層マンションの計画もある。僕たちヤモリはあんまり近寄らないけど、イモリは、あの地域をずっと縄張りにしてたのに、沼は埋め立てられるし、用水路は暗渠にされるし、さんざんなのさ。もしイモリが命がけて反乱を起したら、嫁姑の喧嘩ぐらいじゃ、おさまらないよ」

「……」

「ああ、いい風だなあ。自然の涼風が一番だ。僕はもう寝るよ、昼間、何回もチャイムに起こされて、昼寝ができなかったから。ごめん」

あくびをしながら、お休みなさいと言って、モリオの姿は瞬く間に消えてしまった。相変わらず身を隠すのが本当に早い。

モリオの話した沼部女史の家について、ぼんやり考えた。

長い舌で舐める、というのは、モリオもよくやるしぐさだ。行儀が悪いと思っていたが、そうしないと、目が乾いてしまいうらい……。

電話の音に中断され、部厚い事典をそれっきり閉じてしまった。

拓司からの、久しぶりの電話だった。七月末に帰るつもりが少し延びて八月になるけど、その方が、夏休みもまとめて取れるから、十日間ぐらいいは居られると思う、と言った。変わりはなく、と聞かれ、元気にやってるわ、と短く答えた。職場のことは話したくなかった。それに、ずっと連絡がなく、もう戻る気はないのだろう、と半ばふてくされて思っていた。だからか、意外な電話が嬉しいのに、かえって言葉が出てこない。これまでも、三年半も一緒に暮らしながら、肝心なことは何一つ話さないまま過ごしてしまっただのだ。拓司の方は、もともと口数が少ないので、用件だけ伝えると、すぐ電話を切ろうとする。で、あの、と私は唐突に言いかけた。

「何？」

「あ、あの、虫とかに刺されてない？」

「虫？」

「ほら、いつか、ヒルに食いつかれて大変だったって言ってたじゃない」

「ああ、こんどの現場はもう少し町なかだから、心配ない

といつても、個人的な話はほとんどしたことがないので、住まいが荒川の近くの、地下鉄の新駅ができた辺りにあり、夫の両親と同居している、というぐらいしか知らなかった。だが確かに、自分の家の話とは言わなかったが、古い家を壊したら云々、と言ったし、事務所の移転についても、急に弱気になっていた。

モリオの言うとおり、もしかしたら、女史の家で何か騒動が起こり、それで、どことなく感じが違ってきたのかもしれない、と思った。だけど、イモリが絡んでいるって何だろう。そもそも、イモリとヤモリって、どこが違うのだろうか。

考えてもはっきりしないので、夕飯の片付けをすませてから、百科事典を引っ張り出して調べてみた。

イモリが両生類で、ヤモリは爬虫類、なるほど、そこがまず大きな違いか。紛らわしいのは、家森、と書いた場合らしい。イモリなのかヤモリなのか、はっきりしなくて、地域によってイモリと思われたり、ヤモリになったりしたらしい。本当は色も違うし、前足の指の数も違う。イモリは四本で、ヤモリは五本あるのだ。

日本にいるヤモリは、と、写真にあるヤモリを眺める。どれも、モリオよりずっと大人っぽい。あ、ヤモリは、眠るときにも目を閉じないのだ。なあんだ、お休みなさいなんて言っても、そのまま目は開けたままなのか。その目を

よ。君こそ、かぶれやすいんだから気をつけるよ。蕁麻疹、出ないの？」

「うん、このところ調子いいわ」

「そっか、ならよかった。じゃあお休み」

「お休みなさい」

電話が切れた。相変わらずの愛想無しなことから、と物足りなく思いながら、それでも、ちょっぴりしみじみとした。私のかぶれやすい体質を心配してくれたのだ。ここにいた頃は、ちゃんと病院に行けよ、とぶっきらぼうに言うぐらいだった。だけど覚えていたんだ、蕁麻疹の出やすいのを。いや、そういう体質の私のことを――。

しかし、沼部編集長との軋轢については言わずにすんでほっとしたのだが、モリオのことは、話そうと思っただのに、結局言い出せず、ヒルの話でごまかしてしまい、それが、心のどこかに引っかかっていた。

この家の中にヤモリがいて、ときどき私に話しかけるなど、どう考えても変だし、信じてもらえないに決まってる、と口をつぐんでしまった。たとえ拓司にでも、話せないことはあるのだ、と、無理やり自分を納得させようとした。まあいいか、彼が帰ってくるのは八月初めで、ひと月も先なのだから。

開けたままだった流しの前の窓を閉めようとして外を見ると、少し端の欠けた月が中空にあった。

あとひと月か。そう呟いた途端、あの小学生だったとき、従弟の杜夫が、魅入られたように月を見ていた気が、少しわかったような気がした。

満月の日に迎えに行くから、と叔母に言われていたのだろう。叔母は、叔父と離婚の話で揉めていて、決着が付くまでと行って杜夫を祖母に預けていたのだ、とあとで聞いた。次の満月の日には迎えに来るから、それまでお利口にしてるのよ、と母親に言われて、だから杜夫は、母が来る日が待ち遠しいような、反面、空恐ろしいような、何ともいえない気持で、どうしても月から目が離せなかったのだろう。

二週間が経った。私は相変わらず、雑報の整理と、譲ります、差し上げますコーナーの担当のままである。それと、カルチャー講座の申し込み受けの電話番号も兼ねているので、昼休みもフミさんに弁当を買ってきてもらい、たいてい編集部に残っていた。

夏休みが近づき、出稿するクライアントが増え、他の皆は取材に行ったり、記事を書いたり、それこそ猫の手も借りたいたいほど忙しそうだが、手伝うわけにもいかないのだから、私は電話の前でぼんやりしていた。

いや、もう一人、もっと茫然としている人がいた。沼部女史である。彼女も編集長席に座ったまま、記事を書き終

ただけなのだが、木曜日の夕方、早刷りの紙面が届くと、ちょっとした騒ぎになった。

私はちやうど給湯室で湯のみ茶碗を片付けていたのだが、フミさんが、急にこれから取材になったの、とぼやきながら立ち寄ると、

「譲りますコーナーのイラスト、あれって、どうしたの」と言ったのだ。

「ああ、あれ、何だか半端に空いちちゃったから、仕方なくて自分で描いたの」と答えると、

「ふーん、やっぱり。久々にちよつとあるかも。でも、気にしない方がいいわよ。私は一目見て気に入ったし、神林君たちも、いいねこれ、紙面が楽しくなったって、営業部長に見せに行つたぐらいだから。でもまあ」

フミさんはそこまで言うのと、遅れそう、と急いで出ていった。

彼女の先触れで覚悟はしたのだが、部屋に戻ると、本当に久しぶりに見る女史の、噛み付きそうな顔が待ち受けていた。

「あなた、これ、どういうつもりなの。原稿はすべて、編集長のあたしに報告する義務があるのよ。勝手に、こんな」自分の席に座ろうとすると、紙面を突きつけられた。

「申し訳ありません」

当然の叱責であるし、あらかじめフミさんに言われてい

えた久美さんや藤谷さんが、原稿のチェックをお願いし、す、と持つてくるとそれに目を通すのだが、それ以外はほとんど同じ格好をしていた。一応、手許に書類のようなものを広げてはいたが、それに目を通してはいるふうはなく、同じ姿勢で固まっているのだ。

女史がそんな様子なので、以前のような叱責どころか、皮肉を言う素振りもなく、それなら、というふうにも、この与えられた仕事をともかく続けよう、という気になっていた。

おそらく、他の人から見たら、私が依然として女史にいいめられているという図式なのだろうが、実際、たまに立ち寄るアド広の池田は、義憤に耐えないという顔をする。だが、不思議に私自身の気持は以前と違って、その証拠に、譲りますコーナーのスペースに急に空気ができるとき、私はそこにふと思いついたイラストを描いて、それに時間を忘れて熱中してしまったのだ。

この欄は、読者が譲りたいとか譲ってほしいという品物の名称とその希望価格、連絡先ぐらいしか載せないの、予定していたスペースが余ったときには、担当者が適当なカットを載せ、女史の検閲なしで、紙面になる。そこまで考え、私が勝手にイラストを描いてそこに載せたわけではなく、何冊かイラスト集を探しても面白いものがなかったたので、思いつきで、モリオの、照れ臭そうに笑う姿を描いたから、ここは神妙に、と頭を下げた。その拍子に、机の上に置かれた紙面の、譲りますコーナーのスペースに描かれた「モリオ」と目があつてしまい、飛び出た目玉が一瞬ウインクしたような気がした。それで、つい、下げた頭をそろそろつと上げ、女史の顔を見てしまった。

どうやら、いつかのときみたいに、女史の顔を見て、じつと見て、見続けてしまったらしい。それは翌日、倉田さんにそうだったわ、と言われたのだが、私にはそんな気はなく、ただ、頭を上げただけのつもりだったが、女史はそういうに、たじろぐふうに一瞬口をつぐみ、それから身構えるように、

「何なの、何か不服なの。不満でもあるっていうの」と言ったのだ。

「いえ、すみません。申し訳ありませんでした」

私が再度、頭を深く下げてそう言うと、それ以上は女史も言えなくなつたのか、今後は十分気をつけてください、とだけ言って、席に戻りかけた。それなのに、今度は私の方が突然、早口で捲くし立てていたので。

「二ホンヤモリの学名は、ゲッコウジャポニクスっていうんです。ヤモリは、よくイモリと間違えられるんですが、両生類ではなく、れつきとした爬虫類で、だから尻尾を自切するときもあって、トカゲと同じように、またそこから生えてくるんですが、前とは少し色とかは違うんです。そ

れで、生まれたままの尻尾なのか、新しい尻尾なのか、よく見れば、ちゃんと区別できるはずですが、このイラストでは、そこまで詳しくは描けなかったんです。イモリとの違いも、腹側の色が、ヤモリは灰色で、イモリは赤色の模様があるっていうけど、実際に細かく観察したわけではないので、正確じゃなくて、すみませんでした。あ、でもイモリもヤモリも、絶対大事にした方がいいんです。迷信とか崇りがどうのとかではなくて、守宮って書いたり、家守って書いたりするぐらいだから、特に古い家とか、用水路の住処とかは、簡単になくしちゃ、まずいと思うんです。人間は、ヤモリみたいにまた尻尾を作るのは無理だし、イモリやヤモリが住みにくい、暮らしにくい場所は、そういう環境は、人間にとっても住みにくい、暮らしにくいところだと思っんです。きつと、尻尾のちぎれた風みたいに、ふらふらになって、墜落しちゃうと思っんです。どこに落ちるのかはわかりませんが……」

何を言ってるのか、何を言いたかったのか、途中からわからなくなっていた。ただ、女史の、もしかしたらヤモリよりもイモリに似ていそうな、緑がかった目を見ていたら、自分のどこから支離滅裂な言葉が噴き出てきて、止めようがなかった。

「あのおう、お話中のところ、申し訳ないのですが」
営業部の方から神林が声を掛けてきた。

まだ女史との関係はギクシャクしていたが、モリオコーナー——譲りますコーナーがいつの間にか変わった——の担当のほか、新しいペイドものの仕事も幾つか入ってきたのだ。

だが、こんな平凡な、目の前の仕事に追われる毎日は、あとから思えば、嵐の前にある風のような日々であったのかと思う。

八月初め、この週末には拓司が帰ってくると思っていた私のところに、彼が交通事故で大怪我をしたという知らせが入った。

夜遅く、池田が電話をしてきて、福岡の、拓司の同僚が連絡してきたと言った。市内の総合病院に搬送されたが、おそらく三カ月は入院することになるだろうと言う。自転車で作業場に向かう途中の道で、後ろから来た車にはねられたのだった。

その事故の状況が、従弟の杜夫が子供用の自転車で塾に行く途中、後ろから来たトラックにはねられたのと似ていて、私は聞いているうちに体が震え出した。しかし、杜夫ははね飛ばされて即死だったが、拓司は意識があるという。同僚の話では、呼びかけるとしっかり答えるのだという。ただ、はね飛ばされたとき、背骨から腰を強打している、手術をするのだという。

「だけど頭は打ってないし、命には別状ないと医者にも言

「え？」

「このイラストは、あの、オリジナルなんですしょう」
「……」

「今、部長に話して、即オツケーもらったんですけど。これを、今度やる不動産の、スマイルフェアのマスケットにしたいと思っつて。いいでしょう編集長。これ、めっちゃ可愛いですから。こういうキャラクターを探してたんです」
営業主任の神林が、私の苦境を救おうとしたのでは、絶対ないと思っつ。

彼は中途採用の三十五歳で、童顔だから若く見えるが、押しが弱いのでいつも部長に怒鳴られてばかりいる。その点では私に同情したのかもしれないが、決して自分のスタイルを変えないマイペースの人だったから、たぶん、この「モリオ」が単純に気に入ったのだろう。

女史だけでなく、私も唾然とした顛末だったが、ただ、意外な展開というのか、スペースの余白を埋めるために描いた「モリオ」が、それから一人歩きして、譲りますコーナーから飛び出し、週刊リブ主催のイベントやフェアでマスケットになり、ちよつとした人気者になったのだから、わからないものだ。「モリオ」が描かれたバッジや、携帯ストラップまで神林は手配し、会場で売ったのだ。

そんなわけで、女史には怒鳴られたが、「モリオ」のおかけか、何とか私はお払い箱にならずにすんだのだった。

われたらしいから」と池田は、安心させるように言った。

「手術はいつ？」私は動揺を抑えて訊いた。

「患部の具合を見てとかで、今、検討しているらしい。脊椎の下の方にある馬尾神経つてのを繋ぐ、むずかしい手術で」

「ばび神経？」

「馬の尻尾つて書くらしい。束になっている細い神経で、それを一本ずつ繋ぐ手術だつて説明されたけど、俺、頭悪いからなあ」と、池田は申し訳なさそうに言っつて、ともかくすぐ行っつてやれよ、と言っつた。

「あの、電話してきた同僚つて……」

女の人のなの？ という言葉を続けられず、だが、私にはなく、なぜ池田の方に連絡してきたのだろうと、混乱した頭にかえつて執念深く疑問が浮かんできた。すると池田が、一瞬の間を置いてから、きっぱりとした口調で言っつた。「拓司が、連絡するのはやめろつて言っつたんだろ。都合が悪くてこの週末には帰れないとだけ伝えてくれつて。だけど、本当のことをお知らせしないといけないから、つて言っつてたな。ただ、それを直接は電話しにくくて、迷つて、で、俺の方に掛けてきたんだろ。拓司の幼馴染で、植松マリつていう女だよ。植松工務店の建て直しを手伝っつてくれつて頼んだ本人だ」

「……」

「すぐ行ってやれよ。事情なんかどうでも、明日すぐ」
池田が繰り返した。

「できるだけ早く。待つてるよあいつ、首長くして」

「明日……」

私が言いかけると池田が、

「あ、リブの方は心配しないでもいい。俺が朝いちで出向いて、事情話しくからさ」

私と沼部女史との関係を慮ってだろう、そう付け足した。「ううん、だいじょうぶ、自分で電話入れるから。ありがとう、いろいろ」

受話器を置いて、なかなか立ち上がれなかった。植松マリという女性については、考えまいと思うせいなのか、池田に聞いた事故の状況だけが、何度も頭に浮かんできた。でも、拓司は生きている、杜夫とは違う、杜夫のように死なせるわけにはいかない、と、堂々巡りのように思い続けた。モリオに気がついたのは、眠れないまま明け方、喉が渇いたので水を飲むようとして台所へ行ったときだ。

流しの前の窓ガラスに、向こう向きに張り付いている彼を見つけた。私が近づいても、そのままの格好で少しも動かず、窓の外を見つめていた。

モリオ、と呼びかけようとして、私はそこに、もう彼がないのを、いや、彼が、真正銘のモリオになっているのを、発見したのだった。

い舌が、薄緑の目玉をひと刷け撫でたのだ。それは、目蓋のないモリオがときどきやる、やらないと目が乾いてしまいうすぐさだ、とは知っていたが、じゃあまた、というモリオの挨拶のように思えた。私はようやく部屋に戻った。

一時間ほどして、旅行バッグに着替えや洗面用具などを詰め終えて、もう一度ドアの外を覗いたら、モリオの姿はもうどこにもなかった。

それから昼前の飛行機に乗るまで、長いような、息つく間もないような時間が流れ、私は今、福岡へ向かっている。

夏休みシーズンで、機内は満席だった。

眠れそうにはなかったが目を閉じ、明け方、手のひらに乗せたモリオの感触を思い起こそうとした。

飛行機に乗る直前になって、沼部編集長に電話をした。今日からしばらく休みます、と前置きもなしに言うと、何だっが一番忙しい週に、と即座に返された。

「今週と来週が夏休み特大号で、そのあと、お盆を挟んで、合併号で一週抜けるから、夏休みをとるならその時期にって、昨日、伝えたばかりでしょう」と、例の、畳みかける口調で叱りつける。

「いえ、夏休みでなくていいんです。でも、お休みします」理由も言わず、それだけを押し返すように言った。一言でも事情を切り出したら、抑え込んでいる不安が溢れそう

私は、モリオだったヤモリに覆いかぶさるようにして、彼の視線の先を追った。薄緑色の丸い目は、白み始めた空に残っている細い三日月を、ひたすら見ているようだった。そっと手を伸ばし、彼の体を囲うようにしてそのまま、手のひらで掴んだ。観念したのか、あるいは寝ぼけているのか、びくともしない。

冷たく柔らかな感触を、じゅうぶん手のうちで味わってから、驚かさないうように少しだけ手を開き、彼の全身を間近で、限なく観察した。

はじめて見たときよりは背丈が伸びたように思えたが、やはり凶鑑で見たカラー写真のモリオより痩せている。色艶も悪い。もし明日から、ここに何日も閉じ込めておいたら、餌になる蚊や小蠅や羽虫も食べられず、もっと痩せかけてしまおうだろう。今度こそ、放してやらなくてはいけない。私は手の中にモリオを捕らえたまま、玄関ドアを開け、まだ薄暗い通路の、電気メーターの台の上に静かに彼を置いた。

縁があったら、大きくなってまたここに戻っておいで。そう呟いてモリオを見たが、何の返事もなかった。拗ねたようにそっぽを向いたままにいる。

自分の決心が鈍りそうな気がした。心許なく、覚束なく、とんでもない間違いを犯しているような気がした。

だが、しばらく見守っていたら、口からすつと伸びた赤

な気がして、棒読みするように繰り返すと、いつまでなの、と懽然とした声で聞かれた。

「わかりませんが、すみません」

もう、どうなってもいいと、強引に電話を切ろうとした。すると、

「八月末に、大宮駅前の新築ビルに移転するのが、本決まりになったの、まだマル秘だけど。だから、それまでには戻りなさい、何としても」と言われた。

その途端、まるでモリオの、いや女史の、赤い舌がすつと、自分の鼻先に伸びてくるような気がして思わず、「はい」と頷いてしまった。



澤つむり

さわ つむり

1949 新潟県生まれ
埼玉県在住
早稲田大学文学部卒
2001 友人たちと同人誌
「狐火」を創刊
同誌19号「家族の樹」が
まほろば賞優秀賞を受賞



「狐火」同人

同人雑誌紹介

故駒田信二の薫陶を受ける

狐火

きつねび

埼玉県

元「まくた」の六人で発足 書き続けることが才能

「狐火」同人会はごく小さな集まりで、故駒田信二先生の元「まくた」のメンバー六人で十六年前に発足しました。二〇〇一年四月に創刊号を発行、二〇〇五年の一〇号まで年二回発行していましたが、その後は年一回となり、二〇一五年の二〇号まで現在に至っております。

現在、仲間は準会員を含めて八名。例会や勉強会などはなく、合評会のみ行なっています。

駒田先生の残された言葉を受け継いで、創作に励んでいる日々です。

次のような駒田先生の言葉を、日頃の創作の指針とさせていただきます。

「その人独特の作品世界を感じさせる作家はどうやって自分独自の表現を身につけたのだろうか。小説を書いていくと、作者本人の生活上での呼吸のリズムが文章に反映されるようになる。テーマが他の作家と大きく変わらぬものであっても、自分なりの切り口を持つことによって作品世

界は違ってくる。作者が獨創性を出そうとすると、さらに自分なりの世界が現われてくる。創造性豊かな作品を常に書こうとすれば、独自の表現世界は必ず現われてくる、と信じた。そのためには、とにかく長く書き続けることが必要である。

駒田信二先生は繰り返し語った。『書き続けることが才能です』と
(一九号編集後記)

「文章は言葉さがしだどつくづく思う。詩やエッセイや小説、その他の文章にしても、書きたいと思う内部にあるものを表現するには言葉を探し、手練り寄せ、編んでいかなければならない。そして選んだ言葉は熟知し、責任を持たなければならぬ。何度も辞書を引き、参考書を繰る。それでも途方に暮れるときがある。

「カルチャーとは、耕地の意味もあります。自分を掘り起こすことです」

カルチャースクールに通っていたころの駒田信二先生の言葉が思い出される」
(二五号編集後記)

狐火同人会

〒341-0021

埼玉県三郷市さつき平2・2605朝倉方

☎連絡先048・951・8619

花ことば

多嶋海彦

めんどりら砂浴びゐたれひつそりと

剃刀砥ぎは過ぎ行きにけり 茂雷

玄関の引戸を開けると、頭上でチリチリと鈴が鳴った。途端に強い臭気あじが鼻をついてきて、二郎は思わず顔をしかめた。

エプロンの前で手を拭きながら嫂あによめの秋子が出てきた。

「ごめんなさい。よその人には縁側ひさまずのほうに回ってもらってゐるんですけど……」

磨きあげられた廊下にきちんと跪ひざまずき、丁寧にスリッパを揃えながら申し訳なさそうに言った。淡いピンクのエプロンのせいか半年前に比べ表情に少し明るさが戻ったように

見える。水仕事の途中だったようで、エプロンには濡れ跡の水玉が飛び散っていた。

二年前に兄が急逝し、その半年後、父が寝たきりになったが、遠方に住んでいて多忙な二郎は、何か用事のある時だけ、せいぜい半年に一度くらいしかこの家に帰って来られない。だから二つ年下のこの嫂あによめに、寝たきりの父の世話を任せっきりにしているのだ。

臭気あじの元がその父であることはすぐに分かった。

「夕方帰られるのかと思ってきました。応接間で待っていて下さいな、すぐお義父ちやうさんの始末をしますから……」

さり気ない秋子の言葉だが「始末する」という言い方は二郎は少し引かかった。

「かまいませんよ、すぐ顔を出したほうがいいでしょう」

「そうですか、そりゃ喜ぶでしょうけど、ちょっと臭いと思えますよ」

「かまいませんよ」

顔をしかめたことのお詫びのつもりもあってそう念を押して、父の部屋のある二階の階段に向かいかけると、

「あのう、こっちの部屋なんです」

と、目の前の部屋を指した。

「どうしてもこっちがいいって言うもんですから」

正月に帰った時には二階に寝ていたのに、どおりで臭いわけだ。そう言えば、この家が出来た時、父はこの玄関脇の八畳の部屋を自分の部屋に使っていた。だが、片付け下手のくせに玄関近くの部屋は困ると母にほやかれ、半年ほどで二階に追いやられてしまったのだ。その母もいなくなつた今、父は秋子にわがままを言ったのだろう。

部屋の敷居を跨いだ途端さらに強い臭気あじが鼻をついた。

「あら、やつぱりちよっと臭いわよ、おじいちゃん。一杯なんですよ、きつと」

秋子は軽く言うが、これが「ちよっと」なのか？ と二郎はあきれた思いがした。

八畳間の片隅に小さく寝床が敷かれていて、そこにまるで漂着した流木のように父が横たわっていた。蒸し暑いのか薄いタオル地の掛け布団を腰までずり下ろし、寝巻の胸をはだけている。そこに肋骨が露わに見えた。父は、肉の

削そげ落ちた腕を腹の上で組んだまま、秋子の声に少し視線を動かした。

「二郎さんよ。あらあら、やつぱり」

腰の掛け布団をチラッとめくると、下腹部辺りに茶色い潰れたビニール袋のようなものが見えた。それが匂いの元に違いなかった。秋子が慌てて蒲団でそれを隠した。

「いくらなんでもこれではね……二郎さん、やつぱり応接間で待っていて下さい。直ぐ済みますから」

秋子が腕まくりを始めた。

「ほらほら、おじいちゃん、じつとしてよ、この手をこちらにっ」と

その声を背中に聞きながら、二郎は部屋を出た。

秋子は二郎の前では父のことを「お義父ちやうさん」と呼び、父に呼びかける時は「おじいちゃん」と言う。それを巧みに使い分けていて、間違えたことは一度もない。子どもがないのだから「おじいちゃん」はおかしいはずだが、いつの頃からかそう呼んでいた。

——早く本当におじいちゃんになりたいんだからいいじゃないか。おまじないだと思えば……。

父はそう照れ笑いをしていたが、肝心の兄がいなくなつた今ではそのおまじないも効きようがない。

そんなことを思いながら、応接間のソファーに身を沈めた。家の中は森閑としている。

そつと腕の辺りを嗅いでみたが匂いはない。秋子はどうなのだろう。二郎にくらべ匂いに鈍感になっているようだが、それは秋子自身に匂いが染みついているからではないだろうか。いつかそれを確かめてみたい、ふとそう思つて、慌てて打ち消した。

ガラス戸越しにぼんやり庭を見てみると、紫陽花の群れが見え、その一隅に真っ白な花を咲かせた低木が目についた。(おやつ)と二郎は思った。

——どうしても咲かないんですよ。

いつか秋子が嘆息していた、山梔子くちなしに違いない。あの山梔子が咲いたのだろうか。二郎の脳裡に今もはっきり残っているその日のことが浮かんで来た。

二

秋子が小首をかしげてそう呟いたのは、兄が死んだ直後だったから、丁度二年前の事だ。

今日のようにどんより曇つて蒸し暑かつた。庭の花を剪つて兄の墓に持つて行こうと、下駄を突っ掛けて庭に出た二郎は、ムツと土熱れを感じたのを覚えてる。

庭の花木はみな、几帳面だった兄が丹念に育てたものだ。兄は何事に対しても非常に丁寧だったが、決して熱中せず、冷静で慎重に、一歩距離を置いた接し方をした。

兄流のそういう懇慫無礼ともいふようなやり方には、

いるはずの秋子が佇んでいた。

「いいんですか、もう起き出して」

「いつまでも寝ていても仕方ないわ……私も連れて行つてもらおうと思つて」

うっすらと化粧もしている。数日間蒼白だった顔に、少し赤味が戻つて、妖しいまでに艶やかだ。

「そうですか、紫陽花でいいでしょうね」

「……ええ、なんでも」

中くらいの花を剪り取り秋子の目の前にかざした。

するとその花に顔を寄せ、

「香りがあるんですね、紫陽花つて……初めて知つたわ」

と驚いたように呟くと、髪を掻き上げ、白いうなじを見せながら大きな笑顔を見せた。久々に見る秋子の笑顔につられ二郎もほほえんだ。土熱れに混じつた紫陽花の香りが二人を包んでいた。

その時、秋子の顔がふつと曇つた。

「咲かないんですよ、どうしても」

その視線は、紫陽花の傍らにひっそりと立つ一本の灌木に向けられていた。

「山梔子なんです。咲いてくれると綺麗なんですけどね」

「どうしてでしょう」

「本当にねえ、肥料も十分だし、あの人が丹念に面倒をみていたんですけど」

見かけと違つて愛情が感じられず、二郎には不満だった。だがそれは兄に対する妬みだとも思えた。凝り性だが飽きっぽい自分に時折嫌気がさし、兄のそんな性格を羨ましいと思うこともあったからだ。とは言えやはり、兄のような理性的で欠点のないタイプの人間を二郎は本能的に好まない。失敗覚悟で何かに熱を挙げ、それに飽きると又別の何かを求めてゆく、そんな「遅しくて弱点だらけ」のほうが好きだった。それは自己弁護のための詭弁かも知れなかったが、兄は兄、自分は自分なのだ、ひたすらそれを守つて行くしかない、と思うようにしてきた。

ところが、その兄が亡くなつてしまつた今、ふと、兄のああいうやり方は持つて生まれたものではなく、長男として家督を継いでいくために意識的に、やむを得ずやつていたのではないか、と思うようにもなつた。もしかすると今頃天国でずいぶん気ままにあれこれと熱中してやつているかもしれない。一方、この世に残された自分は、生前の兄のやり方で生きて行かなければならないのだろうか。そう思うと背筋が寒くなるのを覚え、思わず肩をすぼめた。

その時二郎は、墓に供える紫陽花の花を剪ろうと、豊かな茂みに向かつていた。盛りが済んだものの、まだまだ見事な濃紫を保っているものが数本あつた。

「七変化つて言うんですつてね、紫陽花は……」

ふいに後ろから声がして、振り向くと二階で床に伏して

そこで一旦口を噤ひそんでから、

「花言葉が『私は幸せ者』とか『優雅』とかなんで、わがままな花なんですよ、きつと」

と、ため息をつくように言つた。

「花言葉」などに興味を持つたことのない二郎は戸惑つた。それで「好きな花はあるんですか？」と陳腐な質問をしたのだが、

「ええ、でも……花言葉があまり良くないんで」

と口を濁したので二郎もそれ以上は聞かなかつた。

しかし、その時の秋子の「花言葉」とか「わがままな花」などの言葉を二郎はなぜかよく覚えていて、時折、思い出すことがあつた。

三

二郎は立ち上がつてガラス戸を開けた。あの日と同じように、ワツと咽返ひびきかえるような土と緑の匂いが流れ込んできた。目を落とすと足元の犬走りに真新しいサンダルが置いてある。黒い革製の男物で新品と見えた。(誰のかな)という疑問が頭をかすめたが、それをつつかけて庭に降りた。

案の定、あの時の山梔子が、見事な花を咲かせていた。

真白で厚ぼつたい六つの花弁が艶やかな光沢を見せている。

三輪がきれいに咲いていて、今にも開きそうな大きな蕾もいくつかある。思わず鼻を寄せると甘酸っぱい香りが鼻

腔にあふれた。葉も、表の深緑と裏の黄緑の対照が美しい。この色も香りも、カッと晴れた明るい陽光の下よりも、今日のようなどんよりした鈍い光りの中が似合うようだ。夕暮れ時や月光の下ならもつといいかも知れない。あの時、秋子は（わがままな花なのよ）と言ったまま言葉を囁んでしまった。あれはどういう意味だったのだろう。兄がいなくなつてから庭は以前より荒れてきたように思う。無理もない。父まであんなことになつて、もう一年半になるのだ。秋子一人で以前のような手入れなど到底出来っこない。紫陽花だつて去年に比べ貧弱になつた。なに今年になつて急に山梔子が咲くとは、一体どうしたことだろう。

その時ちょうど、縁側の先の勝手口のドアが開いて秋子が出てきた。エブロンを脱いだ薄紫のワンピース姿だ。

「咲いたのよ、やつと……」

秋子も二年前の事を覚えてはいるらしい。背中を丸めて近づくと、まるで水を掬うように両の掌に花卉を載せ、そつと顔を寄せた。白いうなじにうつつすらと汗がにじんでいる。「お義父さんの部屋にもあつたでしょう。これを剪つていったんですよ」

明るい悪戯っぽい瞳で一度二郎を振り返つてから、又花弁に鼻を寄せた。父の部屋にあつたのは気付かなかつた。「初めてですか？」

父の部屋の臭いはさほど変わらなかつた。

父は薄目を開けて凝つと天井を見つめている。

「二郎さんですよ、ほらこつち……」

秋子が父の耳に口を寄せて叫ぶように言うと、ゆっくりと揺れるように顔を動かした。視線は天井に向けたまま顔だけを振ろうとするが、思うようにいかないようだ。二郎のほうから少し身を乗り出し、父の視線の中に顔を入れた。父の目が少しゆがんだように動いた。削げた頬の窪みに、窓からの明りが影を作つていて、それが一斉に揺れた。父の目は、驚くほど純粹になつた、と二郎は思った。まるで乳幼児の視線のようだ。外部からの刺激にだけ素直に反応するそれは、何の疑いも抱かず、何の責任も持たない。これが教育行政への貢献で藍綬褒章を受章した、まだ七十三歳の人間の目なのか。

「右手が相変わらず駄目なんですよ、ねっ、おじいちゃん」

秋子はタオルで父の額の汗をぬぐつた。

父が何か言おうと口を動かし始めた。言葉が出て来るまでに少し時間がかかるようだ。

「…ナン…ナン……ノオ…」

「ノオナンカでしょ？」秋子が直ぐに助け舟を出した。

「…シヨオ…ダメダ」

父は頷きながら、干からびた声で言うと、ゆっくりと視

「そうなんですよ、七年目。私がおこへ来た時に植えたんです。このくらいだったんですよ」

伏せた掌を自分の胸の高さに当てた時、襟元から華奢な白い肩口が見え、鎖骨のくぼみがスツと陰を引いた。

「突然咲くなんてことがあるんですかね」二郎が聞くと、「本当にねえ」と首を傾けたが、

「あつそうそう、お義父さんのほう、もういいですよ。待つてますよ」と話題を変えてしまった。

応接間に入るガラス戸の前で二郎は秋子を振り返つて、「このサンダル親父のですか？」とさり気なく聞いた。秋子の足が一瞬止まったようだった。

「いいえ。二郎さんのですよ」

「……」

「この前見えた時におっしゃつたじゃありませんか、庭へ出る履物があるといいなつて」

そう言われればそんな記憶がある。

「それでわざわざ？」

応接室に上がると秋子も付いて来た。

「ほかにも理由があるんです」

訝しげに秋子の顔を見ると、

「魔除けなんです。庭の履物に男物がないと魔物が来るんですつてよ、聞いたことなかつた？」

そう言つて快活に笑つた。

線をもどした。

「そんなことありませんよ。しっかりしてますよ。ご飯だつて一杯食べられるし」

「……テガ、コツチノテガ、ワシノ……テジャナイ」

左手を右手に当てると、いたわるように擦り始めた。

「左手で上手に食べられるじゃありませんか」

秋子がその左手をさすつた。

「食欲はあるんですか？」

食欲が落ちてきたら「近い」と主治医から聞いていた。

「ええ、ええ、それはもう、それだけが楽しみなんですつて、ねっ、おじいちゃん」

父がまたゆっくりと二郎に視線を向けてきた。

「チヨオ…ヘイ…チヨオ」

「なんですか？」今度は秋子にも判らないらしい。

父はしばらく口を閉じた。慎重に考えている様子だった。

「ヘイチヨオソク…」

「あつ、腸閉塞のこと？」

父は大きく頷き、「ヘイチヨオソク……ノトキハ……タベラレナカッタ」と一息で言った。

父は腸閉塞と思つているが、実は大腸癌で、すでに大腸の半分以上は切除されていた。以来、人工肛門を着けているのだが、その後脳にも転移し、右半身の自由が効かなくなつていた。（永くても半年でしょう）と、医師が言つて

いたが、病魔は意地悪く、ゆっくりと父を冒しているよう
で、すでに一年半が経つ。

「そうね、あの時は大変でしたね」秋子が頷いてやると、
満足したようにまた天井に目をやった。

「あっ、そうだ、お洗濯の途中だったわ、ちょっと失礼す
るわ」

秋子は父の蒲団の裾を直すとそそくさと出て行った。

すると父が急に大きく見えた。秋子がいなくなつた
せいだろうか。こんな枯木のような姿でも、二郎にとつて
父は父、やはり大きいのだ。何といつても秋子は所詮他人、
その秋子がそばにいて、どことなく実父と子と言う
関係が攪拌され、薄まって感じられてしまうようだ。おま
けに秋子にはまるつきり従順で、父の威厳などどこかへ吹
き飛んでしまうのだ。

「……オ……オカアサンハ……」

秋子が去つたのを確かめでもしたように、突然父が喋り
出した。干からびている上、どこかで空気が漏れているよ
うな声は聞きとり難い。顔を近づけた。

「オカアサンハ……ジョウズニ……ジョウズニ……シン
ダ」

視線は天井に向けたままだ。

「ハヤク……ハヤク……ムカエニキテ……」

抑揚のない声は、機械を通したテープのようだ。

「お母さんがとんでもないことをしてくれました。ワシが一寸
目を離れた隙に……、世間の目や口がうるさいので心臓病
ということにしているからな」

そう言った時の父の険しい顔つきは、藍綬褒章受章者と
しての顔だった。

母は、その一年ほど前から手や顎の贅えを訴えていたの
だが、医者からはあまり相手にされなかつたらしく、周囲
に不満を漏らしていた。二郎にも、

「お医者さんの前に出ると、どうしてもその贅えが出ない
のよ。それでね……」

仕方なく、医者の前でその贅えを真似てやってみたのだ
が、その芝居が見破られてしまい、ますます相手にされな
くなつたのだそうだ。

本人は「パーキンソン病」だと思ひ込んでいたようだが、
勿論そんな診断も出なかつた。贅えのほかはさしたる症状
もない母は、元氣そうに一人で医者通いを続けていたから、
近所の人の目には、死に近い病だなどと映る筈もなかつた。

そして突然、全く突然、母は浴室で自ら手首を切つてし
まつた。父が散歩に出ていて、嫂だけになつたあつという
間の出来事だったそうである。どこで手に入れたのか理髪
師用の鋭い剃刀で深く切つたらしく、僅かの間の大量出血
死だったという。

いかに衝動的とはいえ、そんな悲惨な死に走るほど母の

やがて父は左手を緩やかに持ち上げ、自分の右手首を掴
んだ。右手が痛むのだろうか。秋子がやっていたようにそ
こを擦ってやるといいのだろうか。そう思ったが手は出せ
なかつた。

すると父の左手は、掴んだ右手を自分の咽喉に当てた。
苦しいという意味だろうか。そのまま見ていると、

「ジロウ……ハヤク……ジロウ」と、何か訴え出した様子だ。
力が入らないらしく父の両手は咽喉の上でガタガタ震え
るばかりだ。その時ようやく、二郎は父の意図に気付きハッ
とした。

「駄目だ、そんなことしちや」

慌てて父の両手を咽喉から引き剥がそうとしたが、予想
外に強い力で抵抗してきた。二郎は本気になって、やつと
それを放すことが出来た。

「オカアサンハ……ジョウズニ……ジョウズニ……シン
ダ」

父はまたそう言った。天井を見つめたままの目がうつす
らと濡れているのが判つた。

五年前、母が突然自死した時、父は極めて冷静だった。

狼狽していた兄夫婦にてきばきと落ち着いた指示をしてい
た父の姿が、少し遅れて駆けつけた二郎の目にも印象深
かった。舐もまだ矍鑠かくしやくとしていた。

心を蝕んでいたものが一体何だったのか、二郎にはいまだ
に判らない。ただ、息子の嫁を驚愕させ、夫や息子達に肩
身の狭い思いをさせるような死に方をしたそんな母を、父
や兄同様、恨めしく思ってきた事は確かである。

その母を、父はしきりに思い出している様子で、「上手
に死んだ」とは、いかにも今の父の思いが凝縮された言葉
だと思えた。

四

「二郎さん」

襖越しに秋子の抑えた声が聞こえた。

「お茶が入りましたから……茶の間で待ってます」

父に氣遣つてか、潜めた声がなんとなく妖しく聞こえ、
二郎はそつと父の寢床を離れた。

茶の間で秋子と向かい合つて座つた。こうしてゆっくり
向い合うのは初めてで、秋子が妙に眩しく感じられ、
胡坐をかいた足がなんとも落ち着かなかつた。

「少し太つたでしょ、私」

父に対する愚痴が出てくると思つていた二郎は、秋子の
そんな切り出しに、面食らつた。

「そう言えば……」

取りあえず相槌を打つたが、本当にそう思つたわけでも
ない。

「着痩せして見えるのよね、私」

「そうですか」

「あら、二郎さんがそう言ったのよ。ほら、あのアルバムを見た時」

三年ほど前だったか、兄と三人でアルバムを眺めていた時のことを二郎も思い出した。秋子の水着姿があつて、衣服の上からは華奢に見えるが、実に豊かな肢体だった。肌は雪のように白く、その眩しさに、兄の前であることも忘れて二郎は思わずそんな言葉を吐いたような気がする。その時の秋子の含羞はにかんだような顔も浮かんできた。

二郎は改めて秋子を見た。確かに頬から首筋にかけての嬌なほやかな曲線に少し厚みが増したように感じられる。そんな二郎の視線を避けるように秋子は俯いて急須に熱湯を注いだ。

「口のほうもだんだん駄目になっていくようです。ちょっと複雑な言葉になるとなかなか出て来なくて……」

話題を変え、急須を上下に動かしながら二郎の湯呑みにお茶を注ぐ。

「もつとも、腸閉塞とか脳軟化症とか、私たちにも言いにくいわね」と、白い歯を見せた。

「お袋のことはよく話すんですか？」

「お義母さん？ いいえ、一度も。嫌なんですよ、やつぱり」

さっきの父の言葉は秋子には内緒にしておいたほうがいい

いようだ。

「悪かったかしら、さつきは」

ふいに神妙な顔つきで秋子が二郎を見た。

「サンダルのことです。迷ったんですけどね、今度見えるって電話をもらった翌日、買っちゃったんです」

サンダルのことことに拘こだまっているのに二郎は内心驚いた。

「いいえ、いいじゃないですか。魔除けなんですよ」

動揺を隠すようにゆっくりお茶を啜すすった。

「そうですか、良かった。でもね、あの話……あの魔除けって言うのは私の思いつきの作り話なんです」

「そうだと思った」

「いやね、真面目に聞いてた振りをして」

秋子は安心した様子でコロコロと笑った。二郎もつられて笑った。

笑いながら、おやつと思った。茶の間の雰囲気のごとくなく以前と違うのだ。素早く室内を見回した。

その怪訝な様子に秋子が気付いた。

「あッ、お仏壇？ あれ二階に上げちゃったの」

そうだ、兄の仏壇がなくなっていたのだ。

「おふくろの部屋？」

「ええ、大の仲良しだったから一緒にいいと思って」

悪戯いたづらっぽく肩をすぼめた。

あんな大きな重い物を一人で運べたのだろうか、と思っ
ちでは一年目ですよ、それで一年進えていたらしくて……」

秋子の実家のことを言っているらしい。ほっとして二郎も話を合わせた。

「連絡しなかったんですか？ 去年」

「ええ、どうせ来るはずがないと思ったから」

「今年は来るって言ってるんですか？」

「いえ、そういうわけじゃ」

その目が遠くを見つめ始めたようだ。

秋子の実家は東京の新宿にあると聞いていた。

(首都高速のランプを下りて、高架を潜って直ぐなんだ)

何かの折に兄がそう説明してくれたが、そんなところに民家があるものなのだろうか、と疑問に思ったものだ。母親が早く亡くなり、行商のような事を営む父親の手で育てられたとも聞いていた。それ以外の事は殆ど知らない。兄弟姉妹や親戚の事も聞かされていらない。そもそも秋子は実家との行き来があまりないようだったし、話題にもならなかった。意識的なのかとも思って、こちらからは聞かないようにしてきた。そんなことだからなおさら、兄の言った実家の所在地というのが不思議な場所のように思えた。その秋子が初めて実家の話をしたのだ。

そう言えば、去年の兄の三回忌に秋子の身内は誰も来なかった。こちらも二人きりの兄弟だったから、結局寝たき

ていると、
「三日かかっちゃいました。案外バラバラになるんですね、あれって。でも手を掛けるところが少なくって階段で苦労しました。さっぱりしたでしょ、この部屋」
見ると、仏壇の置いてあった位置には三面鏡がある。それまで仏壇に向かっていたその場所で、秋子は今、三面の自らと向かい合っているのだ。
「なるほど、考えましたね、仏壇のあとに鏡とは」
思わずそう口に出して、慌てて喋しゃべりだ。自分でもどうしてそんなことを言ったのかよく判らなかつた。なんとなく、仏壇の跡には鏡がよく似合うと思ったのだが、それは少し不躰な事のように思われた。
「どうして？」案の定、秋子は訝しそうな顔をした。
「いやいや、ちょっと……」と口を濁し、「うつとおしいですよ、仏壇は」と作り笑いをしながらお茶を啜すすったが、秋子は笑わなかつた。訝しさが憂うれいに変わってきた。
秋子にはこんな憂い顔が良く似合う、と二郎は思った。
生まれつき寡婦くわふの似合う顔付きとでもいうのだろうか。「天性の寡婦」、そんな言葉が浮かんだが、勿論口には出せない。
「ねえ、二郎さん」
深刻な顔のまま。まるで二郎の頭の中を読まれたかのように、ドキッとした。
「私のほうではね、三回忌って二年目にやるんです。こっ

りの父と三人だけのひっそりとした法事だったのを思い出す。その兄の命日が明日だった。

「何か言ってきたんですか？ 実家のほうから」

さっき気付いたのだが、仏壇の跡に置かれた三面鏡に秋子の横顔が映っている。その顔に向かってさり気ない口調で聞いてみた。

「ええ……いえ、別に。ただ、区切りがつくだろうって……でも、そうはつきり言われたわけでも」

湯呑みを両の掌で捧むように持って、ゆっくり廻しながら、鏡の中の秋子が言った。横顔に憂いが溢れているのが判った。

「ただそれだけなんです。だからと言って来てくれるわけでもなし」

そこで言葉が切れ、急に明るい横顔に変わった。二郎は真正面の実物の秋子に視線を移した。

「明日、ご一緒してくれるんでしょう？ 私、自信がないんです、あの霊園の中って、まるで迷路みたいで」

「僕だって判りませんよ。入口に事務所があったでしょ、あそこで聞いて行けば」

行くとも行かぬともつかぬ曖昧な言い方をした。その時ふと、秋子にはつきり「一緒に行ってほしい」と言わせたという意地悪な気持が起こっていたのだ。

「誰もいませんでした、あそこには。それで困っちゃった

んです。仕方なく前に行った時のことを思い出しながら周囲の山の方角で見当を付けて歩いてみたんですけど」最近一人で行った時のことらしい。

「石鍾山の端が左手のこの辺で、皿ヶ嶺が正面のこれくらいのところ、それになって言いましたっけ、あの水桶の置いてある三角屋根の小屋、あれが近くにあったはずだと……でも」

手振りを加えながら夢中で話していたが、そこで肩を落として一息ついた。

「駄目でした。山はどこから見ても余り変わらないし、目当ての三角屋根の小屋。あれって沢山あるんですね。歩けば歩くほど判らなくなっちゃって、とうとう諦めました」

「諦めちゃった？」

「ええ、それがね、とつても良かったんです」

そこでお茶を一口素早く飲んだ。柔らかく揃えた五本の白い指が薄緑の茶碗に美しく映えた。

その時ふと、誰かの小説に、そんな指の様子を何かの花の蕾に譬えた表現があった事を思い出したが、それがなんだったか思い出せなかった。

「突然、桃畑に出たんです。ホントなんです。それがもう、とつても綺麗な、ちよと桃の花盛りで……。あんまり綺麗なんでつい、そこに入って。それでお弁当食べたんです」

「お弁当？」

秋子の表情から逃げて行こうとするその明るさを逃がすまいと、かき集めるようなつもりで答えると、途端に秋子の表情が晴れた。

「よかった。迷っても二人なら大丈夫だわ」

愁眉を開いた表情で呟くと、「さっ、お洗濯ものを干してこなくちゃ。それからおいしいものを作りますね、お夕食」と腰を上げた。

三面鏡の中の秋子も立ち上りすぐに消えた。

「あつ、今晚夕食要りませんよ、友達と約束してますので」二郎が後ろから声を掛けると、一瞬足が止まった気配がしたが返事がない。もう一度繰り返そうとした時、

「判りました」と静かな声が返ってきた。

さつき出かかった、白い指を花の蕾に譬えた小説のことが脳裡に残ったが、結局思い出せなかった。

五

そういう母も酉年だった。「ごめんさいね。そんなことで結局、今年はまだお墓参りをしてないんです。明日はなんとしても辿り着かなくっちゃ、と思って。でもお忙しいなら仕方ありません」

眉宇に滾っていた明るさが拡散していくように秋子の表情が曇ってきた。「いや、ご一緒しますよ。でもあまり当てにはなりませんよ、僕だって」

店を出た二郎は、降り出した雨の中でタクシーを拾うと、酔いの廻った躰をシートに預けた。午前零時の時報がラジオから聞こえた。幼馴染の広岡との二年ぶりのお喋りについて時間を過ごしてしまったのだ。自分のアパートなら少し足音を忍ばせて階段を上がれば誰にも迷惑をかけない。しかし、今日はそうはいかない。秋子はもう寝ているだろう。チャイムを鳴らすと父が目覚ましてしまうかも知れない。

もっと早く戻るつもりだったのだが、広岡の奴がつまらぬことを言うものだから……。

「おい、お前まだ独身なんやな」

広岡の妙な話はそう始まった。

「この間も言ってたな、しつこいぞ」

先日の電話でもそんなことを言っていたのを思い出して二郎は少し強い口調で返した。

「いや、ちょっと確かめたかったんや、妙な噂があるんで」

「噂？」

「別に本気にしとるわけじゃないんやがな」

「そこでちょっと切って、」

「そりゃそうと、もう二年になるな、兄さん」

広岡は兄と同じ地元の役所勤めで、現在は二年前の兄と同じ職場だと聞いていた。

「今日も職場で話題になつてな、線香を上げに行こうかって。でも結局止めとこうつて事になったんや、去年のこともあるし」

「去年？」

「あれっ、知らなかったんや」

（困ったな）と呟いて広岡が頭に手をやったところへ、ウエイトレスがスパゲッティを搬^運んできた。

「あッ、水もお代り頂戴、二つ」去ろうとするウエイトレ

「奥さんや、つまり兄さんの嫁さん」

「当り前やろ」

「当り前？ 子供もおらんし、まだ三十ちよつとやろ？」

二郎は返事をしなかった。

「三回忌まではともかく、それが過ぎれば考えるんが当り前やろ。お前の当り前のほうがおかしいよ」

（そういう事か）と気付き、父の事がチラッと頭をかすめたが口には出さなかった。

「だから何だっというんや」

無然とした二郎の口振りに広岡は少しひるんだ気配だったが、

「うん、それでや、それでやな、妙な噂が……俺がお前の幼馴染だつてことでなんやかやと聞かれるんや」

広岡は探るような目つきをした。二郎は（まさか）と笑い飛ばそうとしたが、なぜか出来なかった。それでコップの水を呷^あった。

「お前が、いつまでもチョンガーでおるからや」

「……」

「ホントにそんな気はねえんやな」広岡の目付きはさらに探りが深くなった。

「お前までそう思つとるんか」

「いやいや、そうやないけどな。じゃ、いつまで居るんかい嫁さんは」

スに声をかけて広岡はフォークを手にした。

「何があつたんや」

二郎が迫ると、（困ったな）を繰り返してから、

「奥さんに断られたそうなんや……いや俺は詳しく知らんやがな。とにかくそうらしいんや。それに」

そう言つてフォークに巻いたスパゲッティを一気に頬張った。それを嘸^み込^むのを二郎は待った。

「さつき言つた噂つてのはな……ねえ、お水まだあ」

ようやく口を開いた広岡は、空コップをかざして大声を上げた。

「気分こわされんよ、俺がそう思つてるわけやないし、ただの噂だけな」

「いいから早く言つてくれ」

ウエイトレスが水差しを持って来て、広岡のコップに、次に二郎のコップに水を注いだ。

注ぎながらウエイトレスが「いらっしやい」と、丁度店に入つて来た客を振り返つて叫んだので、二郎のコップから水が逸れ、少しテーブルにこぼれた。ウエイトレスが「済みません」と慌てて持っていた布巾で拭いた。

「まだ家に居るんだって？」

ウエイトレスが何度も頭を下げながら立ち去ると、広岡は急に声を落した。

「誰が」

広岡もゆつくりコップの水を飲んだ。

「ベッピンだもんな。もつたいねえつてもつぱらの噂やで」

「いい加減にしろよ。あの人はあの人なりに何か考えてるだろうよ」

言いながら、（本当に考えてるんだろうか）とも思つたが、「とにかく三回忌は明日だ。いずればつきりするだろうから、あまり世間の噂は気にせんでくれ」と取り繕った。

「そうやな、それにしても、人間の運命なんてホントに判らんもんなあ」

広岡の口調が深刻になった。

「お前の兄さんさ。めつたに現場に出ることがなかったのに、あん時に限つて……それも汗を拭くんでヘルメットを脱いだところだつたんだつてな。よっぽどついてなかったんやな。あれ以来、職場のみんなは汗を拭く時もヘルメット脱がらんそうやで。何が落ちて来るかわからん、言うてね」先輩だつた兄を思つてか、広岡はフォークの手を止めて独り言のように喋った。

一時は警察も入つて、故意か過失かと世間を騒がせたあの事故も結局過失という事で落ち着いた。

「そういえばどうしてる？ あの人、竹田さんて言つたな」

二郎が思い出したように聞いた。

「ああ、もう辞めたよ。一年位前だつたな。判るな、いられない気持……」

父と秋子と二郎の前で、畳に額をくつつけて泣き叫ぶように詫びていたその男の姿が目には浮かんだ。足場のポルトを締め直そうと、腰の袋から取り出した時、手が沁つて十メートル下に落ちた一本のスパナー。竹田という男が悔やんでも悔やみきれなかったそのスパナーが、兄の人生の幕をいとも簡単に閉じさせてしまったのだ。

目の前でゴマ塩頭を下げて泣き伏すその男を見ながら、二郎はあの時、秋子が妙に冷静だったのを覚えていた。余りのショックが秋子をただ呆然とさせていたのだろうか。

「あーあ、どうも湿っぽくなってしまったな、場所を変えて陽気に呑もうや」

広岡はそう言って残ったスバゲッティを掻き込んだ。二郎もそれを真似て賛成の意を示した。

それから何軒かの店を呑み歩いたのだが、どこでも、いつの間にか話題が兄の事に、そして秋子の事になった。酔えば酔うほどそうだった。そして気付いた時、時計は十二時近くになっていた。

六

門灯が点いていた。玄関の前に立つと、酔いがスーッと消えてゆくのが判った。そおとチャイムを押そうと親指を出した時、パツと玄関が灯り、秋子らしい人影が出てきた。タクシーの停まる音で目覚めたのだろうか。

「広岡さんから電話がありましたよ。出て行かれた直ぐ後に。出たかどうか確かめたんですって」

「そうですか、遅れたわけでもないのに、心配性な奴だから、あいつは」

脱いだ上着を秋子が素早く受け取った。

「見合いの話なんかないんですか？ っって笑ってましたよ」

「嫂さんに？」

「二郎さんでしょ、勿論」

（あいつめ）と二郎は思った。

「放ついたらいいんですよ、ああいうお節介な奴は」

「心配してるんですよ、二郎さんのことを」

そう言いながら濡れた上着とズボンを抱えて脱衣場を出て行った。

風呂から上がると、きちんと着替えが用意されていた。真新しいバジヤマだった。着替えを終えて出ると、茶の間に電気が点いている。覗いてみると、卓袱台にビールとコップが置いてあった。まさか秋子が飲むつもりではあるまいと、座り込んでビールの栓を抜いた。

酔いは醒めていた上、風呂で乾いたせいかビールは気持よく咽喉を潤した。しばらく耳を澄ますと雨は止んでいるようだった。ジーツという音がした。地虫らしい。その音

「二郎さん？」と、抑えた声をして鍵を開ける音がした。

「すみません」と低い声で答えた。

チリチリと虫の音のような音を立てて引戸が開いた。光の束と共にあの臭いが流れ出てきた。が、今度は顔の皺一つも動かさなかった。

秋子は寝間着姿ではなかった。ずっと起きていてくれたのだろう。

「あらあら、濡れてるじゃありませんか、だから傘を……」

遅くなるようなら傘を、と出掛けに言われたのだが、妙に世話をやかれてるようで、（いや、遅くなりませんか）と断って出て来たのだった。

「お風呂場で着替えて下さい。濡れているものは洗濯機の中へ。ついでにお風呂もどうぞ、あつ、着替えは持つてきてるんですか」

立て続けに言われ、遅くなった後ろめたさもあつて、言われるままに従った。秋子は風呂場まで蹤いてくるつもりのようなのだ。

「着替えは自分で持つてきますから、どうぞ、寝て下さい。

あの、僕のポストンバッグどこでしたっけ」

「ほらみなさい。着替えは揃えておきますから早く濡れた物を脱いで」脱衣場まで来て、二郎が上着を脱ぐのを背中で待ち構えている。

に混じってかすかに水を使う音が聞こえ出した。地虫の声を揺らすように響くその音は、風呂場からに違いなかった。白い肌が何度も目に浮かび、そのたびにビールを呷った。少し酔いが戻ってきた時、突然、頭の上でブーツと大きな音が鳴り響き、思わずコップを落とすところだった。音は短く途切れながらいつまでも続いた。

（ははあ、親父だな）とようやく気が付き、二郎は腰を上げた。

父の部屋に入ると、酔いが一気に醒めるような臭気に襲われ、二郎は思わず息を止めた。案の定、父の左手には長いコードのついた押釦スイッチが握られていた。

父は木の節目のような眼を二郎に向けた。その眼からは、秋子でないので落胆したという気持ちがありありと窺えた。「どうしたの？」

精一杯やさしく声を掛けたが、父は眼をそらしたまま何も答えなかった。

「お風呂に入ってるよ。直ぐ出るから」

そう言ったところで息が苦しくなり、そつと口で呼吸をしていた。強烈な臭いが鼻をついた。父は完全に二郎を無視している。やむを得ず部屋を出たが、茶の間からは相変わらずブザーの音が響いている。

慌てて出てきた秋子と応接間の前で出くわした。

「お義父さんでしょう、ごめんなさい、驚かしちゃって。」

今晩はもうないだろうと思ってお風呂に入っちゃったの」
 タオルで首筋を拭きながら小走りで父の部屋に向かった。

明りが洩れていた。そっと足音を忍ばせて覗いてみた。
 秋子の背中が見えた。父の顔の上に被さるように踏み込んで何かしている様子だ。急いで風呂から出てきたせいか、浅黄色のブラウスの背中のホックが外れ、首から背中にかけて白い肌が露わだった。よく見ると、小声で父に話しかけながらしきりに右手を動かしている。

「僕では駄目らしい……」
 「そうですよ、ビールでも飲んでお休み下さい」
 秋子が父の部屋へ消えると二郎は又茶の間に戻った。

しばらく耳を澄ました。父の部屋からは物音一つ聞こえてこない。地虫の声に混じって今度は夜行列車の通る音が微かに聞こえた。子供の頃からよく聞いた音だった。

父は凝っと、されるがままだ。
 秋子が手を休めて躰を起こした。恍惚とした表情の父の顔が見えた。昼間、不自由な手を咽喉に当てて「ジロウ……ハヤク」と叫んだ時の顔とはまるで別人のようだった。

室内を見回すと三面鏡の横に小さな本棚があるのに気付いた。秋子は一体どんな本を読んでいるのだろうか。並んでいる背表紙を身を乗り出して確かめてみると、『斎藤茂吉歌集』、『現代短歌』など、短歌関係のものが多かった。そんな趣味があったのだろうか。戻ったら聞いてみたいものだと思った。

だが秋子はなかなか戻って来なかった。そのうちに二郎はふと、自分が秋子の戻るのを待っている、ということに気付いてハッとされた。考えて見れば、待っていてくれとは言われていない。父の用事が済んでそのまま寝てしまったのかも知れない。いや、そうに違いない。そう思うと我ながら羞しさと腹立たしさが募ってきた。

隣の部屋に寝床が敷いてあった。枕元に蛍光灯スタンドと灰皿がきちんと置いてある。そういえば煙草を止めたことを話していなかったな、と思いつつ、そこに潜り込み、掛け蒲団を首まで引き上げて目をつむった。

いたたまれなくなつて立ちあがった時、時計がジーッと鳴ってボンと打った。

二階は弾かれたようにその場を離れた。
 そっと二階に上がり、手前の部屋の灯りを付けた。仏壇が扉を閉ざしたまま置いてある。観音開きの扉を開けると、母と兄の写真が並んでいた。母は憂い顔で兄は笑っている。直ぐに扉を閉め、灯りを消した。

二階へ上がろうと廊下へ出ると、父の部屋の襖の間から

秋子は五本の指を揃えてそっと握り締めた。
 その時二郎はハッと思い出した。ずっと、咽喉に小骨がささったようだったその事がやっと思い出せたのだ。そうだが、「夕顔」だった。あの小説の主人公の女性の白い指を、作者は「夕顔の蕾」のようだと言ったのだ。その指で短刀を握り、その主人公は、目の前で自刃した夫の後を追って自らの咽喉を突き裂いたのだ。その小説を読んだ時、二郎は夕顔の花の事をいろいろ調べた。蕾の写真も確かめた。そして花言葉も知った。今それをはっきりと思いついたのだ。それは「はかない恋」「魅惑の人」そして……「罪」だった。かつて秋子が口にした「好きな花がある」というのは「夕顔」に違いない、とその時二郎は確信を持った。

二階へ上がるとうと廊下へ出ると、父の部屋の襖の間から

秋子は五本の指を揃えてそっと握り締めた。
 その時二郎はハッと思い出した。ずっと、咽喉に小骨がささったようだったその事がやっと思い出せたのだ。そうだが、「夕顔」だった。あの小説の主人公の女性の白い指を、作者は「夕顔の蕾」のようだと言ったのだ。その指で短刀を握り、その主人公は、目の前で自刃した夫の後を追って自らの咽喉を突き裂いたのだ。その小説を読んだ時、二郎は夕顔の花の事をいろいろ調べた。蕾の写真も確かめた。そして花言葉も知った。今それをはっきりと思いついたのだ。それは「はかない恋」「魅惑の人」そして……「罪」だった。かつて秋子が口にした「好きな花がある」というのは「夕顔」に違いない、とその時二郎は確信を持った。

七

霊園の道は細く入り組んで果てしなかった。どこか別世界へでも続いているようだった。空は水彩絵の具で描いたように真つ青で、太陽が容赦なく照りつけていた。両側には墓石と卒塔婆が立ち並んでいる。

秋子は五本の指を揃えてそっと握り締めた。
 その時二郎はハッと思い出した。ずっと、咽喉に小骨がささったようだったその事がやっと思い出せたのだ。そうだが、「夕顔」だった。あの小説の主人公の女性の白い指を、作者は「夕顔の蕾」のようだと言ったのだ。その指で短刀を握り、その主人公は、目の前で自刃した夫の後を追って自らの咽喉を突き裂いたのだ。その小説を読んだ時、二郎は夕顔の花の事をいろいろ調べた。蕾の写真も確かめた。そして花言葉も知った。今それをはっきりと思いついたのだ。それは「はかない恋」「魅惑の人」そして……「罪」だった。かつて秋子が口にした「好きな花がある」というのは「夕顔」に違いない、とその時二郎は確信を持った。

二郎が早足で歩くと、秋子が小走りで躓いてくる。歩を緩めると秋子もホッとしたように歩を合せた。秋子は大きな風呂敷包みを抱えている。

秋子は五本の指を揃えてそっと握り締めた。
 その時二郎はハッと思い出した。ずっと、咽喉に小骨がささったようだったその事がやっと思い出せたのだ。そうだが、「夕顔」だった。あの小説の主人公の女性の白い指を、作者は「夕顔の蕾」のようだと言ったのだ。その指で短刀を握り、その主人公は、目の前で自刃した夫の後を追って自らの咽喉を突き裂いたのだ。その小説を読んだ時、二郎は夕顔の花の事をいろいろ調べた。蕾の写真も確かめた。そして花言葉も知った。今それをはっきりと思いついたのだ。それは「はかない恋」「魅惑の人」そして……「罪」だった。かつて秋子が口にした「好きな花がある」というのは「夕顔」に違いない、とその時二郎は確信を持った。

二郎はさらに足を速めた。だが、いくら速めても秋子を振り切ることが出来ない。速めても速めても走る様にしつかりと躓いてくるのだ。

秋子は五本の指を揃えてそっと握り締めた。
 その時二郎はハッと思い出した。ずっと、咽喉に小骨がささったようだったその事がやっと思い出せたのだ。そうだが、「夕顔」だった。あの小説の主人公の女性の白い指を、作者は「夕顔の蕾」のようだと言ったのだ。その指で短刀を握り、その主人公は、目の前で自刃した夫の後を追って自らの咽喉を突き裂いたのだ。その小説を読んだ時、二郎は夕顔の花の事をいろいろ調べた。蕾の写真も確かめた。そして花言葉も知った。今それをはっきりと思いついたのだ。それは「はかない恋」「魅惑の人」そして……「罪」だった。かつて秋子が口にした「好きな花がある」というのは「夕顔」に違いない、とその時二郎は確信を持った。

母の墓の前を通り過ぎた。直ぐに兄の墓があった。墓の前に小さなベンチがあり、二人はそこに腰掛けた。目の前に一本の山梔子の木があった。

秋子は五本の指を揃えてそっと握り締めた。
 その時二郎はハッと思い出した。ずっと、咽喉に小骨がささったようだったその事がやっと思い出せたのだ。そうだが、「夕顔」だった。あの小説の主人公の女性の白い指を、作者は「夕顔の蕾」のようだと言ったのだ。その指で短刀を握り、その主人公は、目の前で自刃した夫の後を追って自らの咽喉を突き裂いたのだ。その小説を読んだ時、二郎は夕顔の花の事をいろいろ調べた。蕾の写真も確かめた。そして花言葉も知った。今それをはっきりと思いついたのだ。それは「はかない恋」「魅惑の人」そして……「罪」だった。かつて秋子が口にした「好きな花がある」というのは「夕顔」に違いない、とその時二郎は確信を持った。

「山梔子ってね、わがままな花なのよ。ほかの花と同じように育てたんじゃ駄目なの。自分だけに愛情を注いでくれないと」

秋子は五本の指を揃えてそっと握り締めた。
 その時二郎はハッと思い出した。ずっと、咽喉に小骨がささったようだったその事がやっと思い出せたのだ。そうだが、「夕顔」だった。あの小説の主人公の女性の白い指を、作者は「夕顔の蕾」のようだと言ったのだ。その指で短刀を握り、その主人公は、目の前で自刃した夫の後を追って自らの咽喉を突き裂いたのだ。その小説を読んだ時、二郎は夕顔の花の事をいろいろ調べた。蕾の写真も確かめた。そして花言葉も知った。今それをはっきりと思いついたのだ。それは「はかない恋」「魅惑の人」そして……「罪」だった。かつて秋子が口にした「好きな花がある」というのは「夕顔」に違いない、とその時二郎は確信を持った。

秋子はそう言いながら、抱えて来た風呂敷包みの結び目をゆつくりと解いた。

秋子は五本の指を揃えてそっと握り締めた。
 その時二郎はハッと思い出した。ずっと、咽喉に小骨がささったようだったその事がやっと思い出せたのだ。そうだが、「夕顔」だった。あの小説の主人公の女性の白い指を、作者は「夕顔の蕾」のようだと言ったのだ。その指で短刀を握り、その主人公は、目の前で自刃した夫の後を追って自らの咽喉を突き裂いたのだ。その小説を読んだ時、二郎は夕顔の花の事をいろいろ調べた。蕾の写真も確かめた。そして花言葉も知った。今それをはっきりと思いついたのだ。それは「はかない恋」「魅惑の人」そして……「罪」だった。かつて秋子が口にした「好きな花がある」というのは「夕顔」に違いない、とその時二郎は確信を持った。

「本当におにぎりが好きだったわね、あの人……」
 それは、兄が愛用していたらしい小さな曲げ輪っばの弁当箱だった。

秋子は五本の指を揃えてそっと握り締めた。
 その時二郎はハッと思い出した。ずっと、咽喉に小骨がささったようだったその事がやっと思い出せたのだ。そうだが、「夕顔」だった。あの小説の主人公の女性の白い指を、作者は「夕顔の蕾」のようだと言ったのだ。その指で短刀を握り、その主人公は、目の前で自刃した夫の後を追って自らの咽喉を突き裂いたのだ。その小説を読んだ時、二郎は夕顔の花の事をいろいろ調べた。蕾の写真も確かめた。そして花言葉も知った。今それをはっきりと思いついたのだ。それは「はかない恋」「魅惑の人」そして……「罪」だった。かつて秋子が口にした「好きな花がある」というのは「夕顔」に違いない、とその時二郎は確信を持った。

開けると、一本の剃刀が出てきた。理髪師専用の大きなもので、陽光を受けて刃身がピカリと光った。その剃刀を

秋子は五本の指を揃えてそっと握り締めた。
 その時二郎はハッと思い出した。ずっと、咽喉に小骨がささったようだったその事がやっと思い出せたのだ。そうだが、「夕顔」だった。あの小説の主人公の女性の白い指を、作者は「夕顔の蕾」のようだと言ったのだ。その指で短刀を握り、その主人公は、目の前で自刃した夫の後を追って自らの咽喉を突き裂いたのだ。その小説を読んだ時、二郎は夕顔の花の事をいろいろ調べた。蕾の写真も確かめた。そして花言葉も知った。今それをはっきりと思いついたのだ。それは「はかない恋」「魅惑の人」そして……「罪」だった。かつて秋子が口にした「好きな花がある」というのは「夕顔」に違いない、とその時二郎は確信を持った。

「ごめんさい、二郎さん……わたし」
 さらに何か言おうとする秋子の躰を思い切り引き寄せた。
 その時、チャリンと小さな音がして何かが枕元の灰皿に落ちたようだった。
 かまわずに二郎はそのまま秋子を蒲団の中に引き摺り込んだ。しなやかな躰から父の部屋の臭いがした。



多嶋海彦
 たじま うみひこ
 本名 田島明德

1945 群馬県生まれ
 幼時より詩、俳句を好み、10歳から句作
 1965から京大三高俳句会で平畑静塔、山口誓子に師事。以後、山口誓子の「天狼」に参加、句作や評論活動を続ける
 大手鉄鋼会社の社内文芸誌の編集に関わり、小説を発表
 1982 文芸誌「海燕」（8月号）に小説『たらちねの』を発表。
 1997 脱サラして瀬戸内の島に移住、文筆生活に入る（句集、評論、随筆集など）
 2004 松山市の経済情報誌の編集長、大手広告代理店のライター&エディターなどを経て著述業
 2012より「海峡」同人
 愛媛県東温市在住

薩摩焼 第十五世沈壽官作



木内是壽氏寄贈



まほろば賞も今年平成二十八年で第10回を迎えます。記念すべきこの回に向けて今年もまた木内是壽氏の御厚意により、まほろば賞副賞に特別記念品として薩摩焼陶器花瓶の名品を御寄贈いただきました。戦国末期四〇〇年以上前から続く伝統の薩摩焼沈壽官第十五世の手になる作品で、時価数十万円と言われています。木内氏の「全国同人雑誌の小説創作に勤しむ方々への励ましになれば」というお気持ちをあたたかくいただき、第10回の優秀作品六編のなかから選ばれた最優秀賞まほろば賞受賞者に贈呈させていただきます。

全国同人雑誌振興会

第10回まほろば賞特別記念品

木内是壽
 Kinouchi Shōji
 そうぞくひゃっけい
 相続百景
 相続版「大往生」
 遺産相続をテーマにした初の小説!
 文芸社◎定価(本体1,200円+税)

アジア ウェーブ 隔月号発行
 五十嵐 勉
 緑の手紙
 NTTプリンテック・読売新聞社/主催
 第1回「インターネット文芸新人賞」最優秀賞
 日本の平和のなかで発狂していくカンボジア難民ホ・シテイ。彼が病院から出し続ける緑の手紙が、戦後日本の繁栄と平和の意味を根底から問いかける!!
 インターネット新メディアで登場した、新手法の力作長編!

1700円(税込/送料共) 御注文は折込葉書でアジア文化社まで

海峽

愛媛県

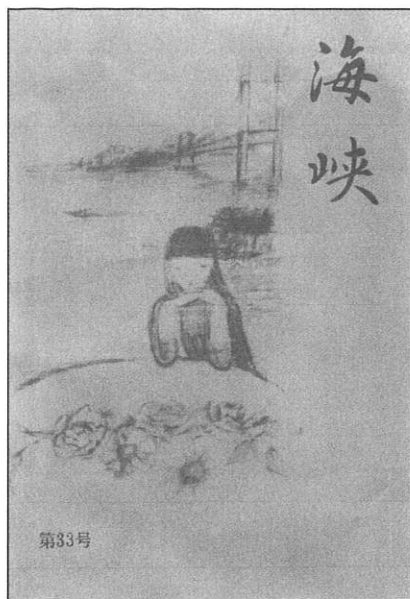
着実な姿勢が味わい深い文章を生む

愛媛同人誌協会の中軸の一つ

しまなみ海道（西瀬戸自動車道）の終点であり始発点でもある町が今治であり、ここで平成九年に立ち上げたのが文芸誌「海峽」です。南に瀬戸内海、北に低い山並に囲まれた造船とタオルの町です。愛媛といえば正岡子規の生誕の地であり、俳句が盛んな土地柄です。俳句同人誌はたくさんあり、愛媛新聞では毎日のように投稿句が掲載され俳誌も数えきれないほど発行されています。そして今また俳句ブームなのかテレビなどでも毎週放映されています。

そのような土地柄に、文学の好きな者の集まりとして、俳句以外の文学の表現の場を軸に誕生しました。まだ同人誌としては若く、また活動の方法も手探りの状態です。会の方針として、

- ・原則として年2回同人誌を発行する。
- ・会員は発行の度に1作品を発表すること。
- ・隔月に発行する同人的ミニ新聞には交代で800字随想を書くこと。



- ・合評会には参加すること。
- ・昨年より参加した愛媛文芸誌協会に参加すること。などとしております。

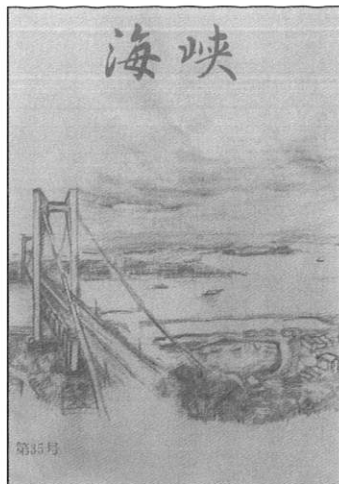
昨年、愛媛同人誌協会に参加して平成二七年度の愛媛同人誌協会賞第一部門を文芸誌「海峽」34号から西山慶尚氏の「祖父の遺産」が受賞しました。（この賞は愛媛同人誌協会と愛媛新聞協賛で愛媛県の同人誌の中から選ばれる賞です）マンネリ化していた同人に快い刺激となりました。

年二回の発行後は合評会をしておりますが、各作品に対して辛辣な意見交換が行われ、意見の対立で知らない人からみればあわや口喧嘩と思われることもありませんが、それは作品に対しての熱い思いであって各自の見方や感性の違い

いから出るものであって、その後は和氣藪々と食事会になつていきます。が何分高齢化となり若い同人が少ないのが悩みの種です。

同人参加は住所・年齢・職業に関係なくオリジナルの作品であればいつでも受け付けています。（小説・エッセイ・詩・翻訳など）会員の中には東京・名古屋在住の方もおります。

関心のある方は是非藤井まで連絡下さい。（090-3788-5207）



海峽

〒799・1522

愛媛県今治市桜井4・2・18 藤井総子方

☎0898・47・3699



「海峽」同人会

なった経緯を聞いて、かつて自分が担当した「地域農業の振興」というものについて、改めて複雑な思いをもって思い返すのだった。

その複雑な思いというのは、資料の地図にある「佐倉七牧」と言われるエリアについて、それがほとんどそっくりこの地域の畑作の生産性を向上させるために計画された「北総四大用水事業」のエリアと重なっていることだった。信一はこの事業の営農対策をかつて担当したことがあるのだった。

二

午後二時、市役所のマイクロバスに参加者二十余人と担当者三人が乗りこんで現地へ出発。十月初旬の良く晴れた日だった。きのうまでの荒れた天気がおさまって、青空のもと、赤とんぼも飛びはじめていた。

バスは市街地をぬけて郊外へ入っていく。台地への坂を登ると、広い畑地帯が広がっている。この北総台地の畑地帯は、今でもラッカセイが多く作られていた。刈りとられたラッカセイを積んだ「ポッチ」があちこちに見られた。その他はどこもサツマイモ畑だった。甘くておいしい食用甘藷の一大産地であった。

信一は、マイクロバスの窓からそういった風景を眺めながら、自分の現役時代のことを思いおこす。彼は大学の農

この歴史散歩の講座も、そうした移住者が多いようだ。その人たちも、みな六十代から七十代になっていた。

「あそこの、畑の向こうに、長く土手みたいになっているところが見えると思います。あれが下総牧の野馬土手の名残です。馬を囲い込むための土手ですね、牧場の境界線とも言えます」

市の担当の人がそう説明する。遠くに、サツマイモ畑を区切るように二メートルくらいの高さの土手が続いていた。信一は、確かずっと昔、このあたりを調査に歩いていたら、あれはかつての「牧」のあとだと聞いたことがあったような気がする。その時はそれにそれほどの興味はもたなかった。

この北総台地にも悠久の時の流れがあった。人は旧石器時代からいたのだらうが、人々の暮らしがいま見られるのは縄文時代からである。この利根川下流の地域は、その昔は今の霞ヶ浦、北浦などを含んだ大きな内海のほとりであった。その内海につき出た台地の突端には多くの貝塚が分布し、近くにはきまっって古くからの神社があった。

人々は延々と生きつづけてきたのであった。

やがて西の方からヤマト朝廷の勢力がやってきて、この地域にも「稲作」が広まっていた。豪族が出現し、村々

学部を出て地方公務員となり、まずはじめにこの北総地帯をエリアとする県の農林事務所へ赴任した。彼のそこでの仕事は、農作物の安定生産に向けての病害虫対策であった。

千葉県の北総地帯は、成田市から香取市にかけて、北は利根川沿いの水田地帯であるのに対して、南はどこまでも平坦な下総台地上の畑地帯だった。水田は全国有数の早稲米地帯として知られていた。それに対して畑作地帯は、ラッカセイが有名であるほかこれといった産物もなかったが、昭和四十年代以降、それまで澱粉用甘藷が中心であった諸作が食用甘藷に転換され、今ではラッカセイをしのぐ作物となっていた。その食用甘藷への転換の時期に信一は病害虫の発生調査に管内を走り回ったのだ。

今、秋空のもと、久しぶりで見る食用甘藷の広大な畑は、信一に過ぎてきた四十年余の歳月を感じさせた。畑はもう収穫の時期を迎えていた。

「この辺の景色は実に平らですね。だから、どこを走っているのかわからなくなる。私の育ったところでは、たいてい目印になる山があったんですがね」

「そうですか、どこのご出身ですか」

「和歌山です」

バスの中でそんな会話が交わされている。この地域は、昭和四十年代に北の方に鹿島工業地帯ができて、製鉄や石油関連の企業とともに関西や九州からの移住者が多くなった。

ができていった。平将門の一派が馬を駆って走りぬけたのもこの北総台地を含む利根川下流域だった。

江戸時代にはいり、新田開発がさかんになった。印旛沼や椿海の干拓なども行われた。利根川に沿って、野田や我孫子、佐原や小見川や笹川など、いくつもの町が発展していったのもこの頃だった。

そういった水田地帯に対して、後背地の下総台地は、谷津にひらけた水田があるばかりで、そのほとんどは不毛の原野のままだった。

この原野に、軍馬を養成するための牧場を作ったのは江戸幕府であった。特に八代將軍吉宗の時代には、武芸の奨励とともに狩猟や馬術が盛んに行われた。天領を中心に野馬土手が整備され、経営管理体制が整えられていった。やがて明治維新となった。新政府はこの広大な下総台地の牧を廃止して殖産的な開墾事業に着手した。実際には明治二年五月に「下総開墾会社」を民間に組織させ、その出資者に土地を譲渡し、入植者の世話をさせるという方法をとった。畑が開墾され、村々ができていった。この村々は、開墾の順番ごとの数字を付した名前がつけられた。今も残る、初富、二和、三咲、豊四季、五香、六実、七栄、八街などである。

佐倉七牧のうち、一ヶ所だけ牧として残ったところがあつた。そこは「下総御牧場」となった。信一は高校生の

頃に一度だけ桜を見に行ったことがある。そこに今は「成田空港」が広がっている。信一は、はるかな気持ちになる。

三

「それではこれから野馬込跡を見に行きます。これは平成五年に千葉県の指定史跡になりました。昔の様子がよく残っています。藪になっていきますので注意してください」

サツマイモ畑のまん中の少し広いところにマイクロバスを停めて、市の担当者の人を先頭に、二十人あまりの老人が歩いていく。草の繁ったせまい農道、数百メートル先にこんもりした森が見える。あれが「野馬込跡」のようだ。

草の道を歩きながら、信一は両側のサツマイモ畑を観察する。バスの窓から見ていた時はわからなかったが、サツマイモは畑全体がひどく葉っぱを食害されていた。ほとんどすじばかりの葉であった。かなりひどいヨトウムシの被害だった。今年の夏から秋が早ばつだったから大発生したのだと信一は思う。

「あら、ずいぶん葉っぱが食べられているわ。おイモの葉だから、おいしいのでしょうね」

「でも、おイモは土の中だから、食べられなくてよかったわ」

歩きながらそんな会話をしている女性たちもいた。信一は、でも、イモをかじる虫もいるんですよ、と心の中でつ

再び野に返すための場所である。

説明板のところからぞろぞろと中へ入っていく。樹木や草が生い繁ってかなり暗い。ミヨウガが自生している。土手は高さ三メートルくらい、落葉などがあつて滑りやすい。みんな気をつけてのぼる。

「この下が捕込場になりますね。それから、あちらが溜込場です。それから、向こうの方に払込場があります」

みんな、資料の図と見くらべている。どことなく城跡のカラ堀のようだ。あるいは塹壕か。それにしても、比較的よく保存されている。あちこちに残る野馬土手もそうだが、考えてみると、これは明治のはじめまで実際に使われていたのだ。百五十年前である。自然の歴史の中で、百五十年前というのはついきのうのことと言ってもよかった。

史蹟を見てバスまで戻る道々、信一はちよつと複雑な気分になっていた。それは、百五十年という時間の流れだった。そしてこの畑作台地の百五十年の歴史の流れだった。信一はその百五十年の中の最近の四十年間あまり、この地域で生きてきた。しかも農業に関係する仕事をして生きてきた。百五十年の四分の一、短くない年月だ。

江戸時代が終って、明治新政府の時代となった。下総の牧は、小金牧も佐倉牧もわずかを残してあとは開墾地の対象となった。維新で職や身分を追われた人たちの救済事業

ぶやく。コガネムシの幼虫が大発生して、サツマイモをすじ状にかじる被害が出て、そのコガネムシの生態を調べるために畑の土をスコップで掘ったことがあった。夏にコガネムシの成虫がサツマイモ畑に飛んできて株元に卵を産み、その幼虫がイモを食べて大きくなり、冬は土の中深く越冬し、五月頃土の中で蛹になる。その辺の生態をまだ新人の信一は調べたことがあった。

やがて、「野馬込跡」の森についた。

森の入り口に説明板があった。もう古びて、書かれてある文字や絵も見づらい。ここは放牧してある馬を追いこんで、この囲いの中で選別して出荷する場所だそうである。

「野馬捕りの図」が描かれている。沢山の馬を、騎馬の侍たちが数人で追い込んでいっている。あたりには、それを見物している群衆の姿もある。

「この日は一種のお祭りみたいで、周りには屋台なども出ていたそうです」

市の担当の人の説明によると、この野馬込跡の史蹟は約四〇〇〇平方メートル、中は三つの部分に区分されている。まず「捕込場」これは追い込んだ馬が最初にはいるところ、そこから選別されて、ひとつは「溜込場」へ入れる。これは幕府へ送る馬や農耕馬などに払い下げる馬を溜めておくところ、もうひとつは「払込場」で、これは若い馬などを

でもあった。

こうして台地の原野は開拓されていった。しかし、稲をつくる低地の村に対して、畑地帯の村は貧しかった。雑穀とサツマイモ、それがこの地域の農作物だった。三年に一回はひどい早ばつに襲われた。ヨトウムシやバッタも大発生した。それでも人々はひたすら開墾していった。

途中に戦争がいくつもあった。日清、日露、そして日華事変から太平洋戦争へ、この地域からも多くの男たちが兵隊となって出ていった。それはずっと昔のヤマト朝廷の頃からそうだった。堅穴住居に暮らしていた彼らは、ヤマト朝廷の先兵として、ずっと北のエミシの征伐にかり出されていったのだ。

太平洋戦争のあとも、開拓のための入植はあった。外地からの引き揚げの対策だ。戦後二十年間、人々は必死で生きてきた。経済の成長は目まじしかった。戦後は終わった。

そしてこの北総台地の畑地帯では、最後まで残っていた下総牧の名残りの御料牧場とその周辺が、突如国際空港の候補地となった。開墾地の農民を中心に、猛然と反対運動がおこった。それはまさに、地の叫びであった。

あれからもう四十年以上の歳月が流れたのだった。

信一は、勤めはじめた頃、サツマイモの害虫の調査をして管内を廻っていた時、この地域の農村に吹きあれた闘争の嵐を思うのだった。そして自分は、この地域の農業をよ

り生産性の高いものにしていく仕事にたずさわってきた。そう思いながら、しかし、と信一は思う。何か淋しい、複雑な気分はそのままであった。

四

信一は、勤めはじめた最初の頃、農林事務所の大會議室で「北総四大用水事業」の説明会が開かれた時のことを思い出した。

管内の市町や農協の担当者、土地改良区などの関係機関の職員約五十人が集まった。そこに、県庁の農政課の企画班の人たちが事業の概要の説明をするというのだった。信一もそれを聞きにいった。

農業に水は欠かせない。特に、日本の稲作は、まず水の確保が重要だった。だから、稲作のはじまりは、今のような平地の広い田んぼではなく、いつも水がしみ出てくるような小さい谷津田からはじまった。やがて土木技術の進歩とともに、灌漑技術も進み、溜池を作ったり、川から大規模な用水をひいたりして、今のような沖積平野での稲作がはじまった。それでもまだ天水頼みのところが多かった。千葉県の場合は九十九里地方がそうだった。そこへ用水をひくという悲願は、戦後になって、大利根用水や両総用水として実現していった。

畑作の方はもともと水は天水頼みだった。千葉県の北部、農業行政の中核で仕事をするに、かつてあこがれをもった気持ちでぶつかっていった。

時代は「米の生産調整」のまっただ中であつた。戦後の食糧増産は、農地改革や技術の進歩、農家の人たちの努力により間もなく達成され、一方で生活様式の急激な変化による米の消費量の減少などから、昭和四十年代には早くも米余りの状況になってきた。こうして昭和四十五年から生産調整が実施されたのであるが、信一は昭和四十六年の採用であつたから、彼はまさに生産調整の時代の子なのであつた。

米の生産調整は、はじめは「減反」という政策であつたが、やがて「水田利用再編対策」へと移っていった。それは、水田を、稲を作る部分とその他の作物を作る部分に分け、生産調整とともに他の作物の生産振興を行い、需給調整と自給率向上という二つの目的を旨とするものだった。この中で主としてとりくまれたのは、水田の大區画化と、それによる稲作の大規模化、さらに水田のブロックローテーションによるイネー麦ー大豆といった生産体制の整備であつた。県内の何ヶ所かで、補助事業を核としたモデル的営農集団が作られていった。

信一の勤めた前半の二十年はそうした「構造対策」の時代だった。しかしそれは、全体的には農地の流動化による規模拡大がなかなか進まない一方で、担い手の高齢化だけ

下総台地のあるところは雨の少ない地域だった。高い山も川もなく、ただまっ平なだけなので、雨になる雲もできなかった。それで恒常的に早ばつに襲われた。江戸時代、青木昆陽がこの地に甘藷を導入したのも、サツマイモが早ばつに強い作物だったからだ。

しかし、これからの畑作は、水がいつでも使える高度なものになっていかなければならない。水が使えれば、ニンジンでも大根でも、ホウレンソウやネギや、そしてハウスの中でトマトやキュウリやメロンが作れる。それはこの地域の農業経営に革命的な変化をもたらすだろう。

今言ったような新しい畑作経営、そのための基幹施設として、国では今「北総四大用水事業」が計画されている。

「千葉県でも、県営事業を含めてこの事業を推進していく予定である。また、水を使った畑作のモデル事業も進めていく計画である。どうか皆さん、この地域の畑作農業の発展に向けて、ご理解とご協力をお願いしたい」

——県庁の農政課の人は、図表や写真の入った資料をもとにそのような説明をした。その時の信一は、このように自信をもって明確な話をする県庁の人に、何か一種のあこがれのようなものを感じたのだった。

農林事務所での病害虫対策の仕事は十年近くやったあと、信一は県庁の農林部に異動となった。三十代の彼は、県の

が急激に進展していく結果となった。そうして後半の二十年は、その構造政策の限界から「消費流通対策」を重点にした農業政策が進められていった。

すなわち、「産消連携」とか「地産地消」といったスロージャーガンのもとに、国内農産物の安全、安心のアピールと地域産品のブランド化といったものが進められていった。信一の終りの頃の仕事は、この北総台地のサツマイモのブランド化に注がれた。市場やスーパーでのPRイベントをやったりした。

今、信一が歩いていく草の道の両側には、収穫を間近にしたサツマイモの畑が広がっていた。ヨトウムシに食われた畑が多かったが、これは農業を使わない栽培の証しでもあった。この地域でのサツマイモの経営は安定してきたように見えた。農家にとっては、何を作ればどれくらい収入があるかが読めるようになった。こうして毎年五月に苗が定植され、十月から収穫がはじまるサツマイモ畑の風景がくり返されるのだった。遠くに野馬土手の跡も見ることができた。

農業は産業であるとともに生業であると思うのだった。そして信一は、自分は耕す人ではないということに突然のよう実に実感した。淋しく複雑な気持は、そこから来ているのかも知れなかった。

「次に、馬に乗った馬頭観音が御本尊の観音寺へ行きます。ここは今は観音堂しか残っていませんが、たいへん珍しい観音様です」

バスは畑地帯からやや広い谷津田の広がる集落へ入って行く。小高い台地のふところに抱かれたような家が、あちらに二軒、こちらに三軒と建っている。このあたりでも珍らしいくらいいのかな農村風景である。

「あの家なんか、山を背負っていてこわくないんですかね」「自然の状態ですから大丈夫なんですよ。関西ではたいてい山を切り開いて家を建てますから、危ないんですよ」そんな会話が聞こえる。

馬頭観音は、その梵語名をハヤグリーヴァ（馬の首を付けた者）と言い、本来は激しく強い性格をもち、忿怒の姿をもつ仏として作られている。その忿怒相の頭上に馬頭をつけ、額には第三の目があり、三目一面二臂、三目三面八臂の像で、馬口印（第二、四指を曲げて掌を合わせる）を組んでいる。

この馬頭観音は、馬の安全を祈ること、と同時に旅の安全を祈ることである。それ故、田舎道に分かれ道などにこの観音が置かれていることが多い。

そうして、馬に乗った形の馬頭観音の石仏というのは、

聞いた。

「観音様には三十三のお姿があると言われてます。いろいろな姿にかわって人々を救うということですね。その三十三ということだと思えます」と住職は言った。

御本尊は見られなかったけれど、廚子の前には木造の「馬に乗った馬頭観音」があった。これは御本尊の前出し（身替り）本尊であった。白い馬に乗った柔和な感じの観音様であった。馬に乗った姿がちよつと見ではあの三蔵法師を思わせた。参加者は、うす暗い観音堂の中で、かわるがわるこの仏像を眺めていた。

「この馬頭観音はとてもやさしいお顔をしています。馬頭観音は普通は忿怒の相をしていて、それで不動明王のように明王の仲間とされたこともあったのですが、この辺の馬頭観音は、石仏にしてもおだやかな慈悲相のものが多くですね。馬に対するいたわりと供養の心のようなものを感じますね」と住職はしみじみと言った。

お堂の外の崖の下に、小さな石仏の「馬乗り馬頭観音」があった。高さ五十センチくらい、そこに結跏趺座型の馬頭観音のレリーフが彫られていた。これも稚拙で素朴な感じだった。右側に「安永六年」と読めた。一七七〇年頃、江戸時代の中期である。二百五十年くらい昔である。

ここは、わずかな谷津田しか持たない畑地帯の小さな集落だった。そのわずかに二十戸余りの農家が、このような観

千葉県に特異的に見られるということだった。その理由のひとつに、下総牧のような馬の生産地があげられるだろう。またその馬を使った生活や農業生産とも関係していたらう。

こうした馬の文化、馬に対する信仰、さらに死んでいった馬に対する哀惜などがあって、千葉県の北総地帯にこの石仏が多く作られたのだろう。信一は、今まで何体か見てきたこの馬乗り馬頭観音の石仏が、どちらかという稚拙で素朴な表情をしていたのを思いおこす。無名の石工の彫ったものであるのだろう。

観音寺というお寺は今はない。そのお寺の跡は今は集落の青年館になっていて、そこに近在のお寺の住職が待っていた。観音堂の案内をしてくれると言う。

青年館のすぐ裏手の高台に観音堂が建っていた。三十段くらいの石段を登って行く。平らにならされた敷地に、どつしりと、かなり立派な観音堂が建っていた。囲りは樹木が鬱蒼と繁り、さらに午後になって日が傾いた中、参加者は観音堂の中へ入って行った。この御本尊は廚子の中に入っていて、三十三年に一回だけ御開帳されるのだった。

「今から三十年くらい前に御開帳されたので、あと三年くらいでまた見られると思いますよ」と住職は言った。「なぜ三十三年に一回の御開帳なんですか」と誰かが

音堂を維持している。信一は、のどかな風景の中に秘められている生業の思いを強く感じるのだった。

マイクロバスに乗って帰る。四時を過ぎて、日は西に傾いていた。サツマイモ畑には赤とんぼが群れ飛んでいた。ところどころに見える農家の庭には、柿の実が赤く色づいていた。

バスの窓から見える西の方の空に、飛行機の姿が見えた。成田空港は開港してからもう四十年近くになるのだった。そして信一は、改めて遠い思いになった。

（「全作家」101号より転載）



嶋津治夫

しまづ はるお

1949 東京都生まれ

71 茨城大学農学部卒業

92 「父との関係」で関西文学賞エッセイ部門佳作入賞

2015 「地の来歴」でまほろば賞（河林満賞）を受賞

著書「白鳥悲歌—常陸国風土記異聞」（2002／澁標）

「蜻蛉日記異聞—芥川龍之介の恋」（2010／驢馬出版）

「一葉探訪」（2015／のべる出版企画）

現在「全作家協会」会員「農民文学会」会員

千葉県香取市在住

金作家

東京都

千葉県農業史を語る小説
「馬乗り馬頭観音の里」

昨年に引き続き、再度、「全作家」第一〇一号掲載の嶋津治夫氏の小説「馬乗り馬頭観音の里」がまほろば賞の優秀賞作品に選ばれました。

全作家協会では、掲載作品を批評する会を開催いたし、当該作品の合評を行いました。四十名ほどの当日の出席会員はこの作品について、文芸評論家の横尾和博氏はじめ全員が好意的な意見を述べました。

「馬乗り馬頭観音の里」は、千葉県北部の下総地方の野馬生産を目的とした牧場の遺跡の見学講座に参加する物語です。主人公は、元々この北総地帯をエリアとする県の農林事務所が勤務地だったため、見学地周辺の農業事情に詳しく、農業政策の進行まで書かれています。



横尾和博氏より文芸時評賞を受ける受賞者

歴史的な野馬足跡を見学し、古代から江戸時代、そして明治から太平洋戦争のあとまでのこの周辺を見事に描写して、内容の濃い作風を生み出しています。そして、主人公が勤務した頃の、この地に「北総四大用水事業」と銘打たれた用水の開削が始まります。牧場地は徐々に稲作、畑作地などになり、さらに広がっていきます。主人公は、病虫害防除の専門家としてこの地方を回ります。さて、物語ではついに「馬乗り馬頭観音」の里に着き、

文字通り馬に乗った馬頭観音の石仏を見ます。それぞれが小さな規模で、二十数戸の農家の集落が観音堂を維持しています。そこで、主人公は農業は産業であるとともに生業なりわいであるという思いを強くします。

この作品は、北総の農業史を日本の農政もからめ客観的にとらえた名作であるといえましょう。

全作家協会といたしましても、嶋津治夫氏のみまほろば賞受賞に際しまして、選考委員の皆様は厚く御礼を申し上げます。また、嶋津治夫氏にはお祝いを申し上げます。今後この分野をさらに掘り下げられますことをおすすめいたします。

金作家

話は変わり、私どもの「全作家」ですが、創刊は一九七六年です。現在では、年四回発行しており、もう一〇二号となりました。

さらに、全作家協会の主な事業をあげますと、全作家文芸賞、全作家文芸時評賞、短編小説優秀賞、出版優秀賞、掌編小説優秀賞、功労賞、ホームページ関連事業などを行っています。

季刊「全作家」、短編集の発行後には必ず合評会を行い、また、年末の忘年会には多くの方が参加します。その合評会などには、毎回、横尾和博氏が参加し、一作ごとについていねいに批評をしてくれます。横尾氏は、全国から集まる膨大な同人雑誌をすべて読み、「全作家」に文芸時評を書いています。

私どもは、豊田一郎会長のもと、陽羅義光理事長、野辺慎一事務局長、吉岡昌昭編集長はじめ、役員、会員一丸となって、日本文学の底辺を支える活動をしています。これをお読みいただいた皆様には、今後ともよろしくお願い申し上げます。ともに文学を語り、また書き続けてまいりたいと存じます。

嶋津治夫氏は、そうした私たちの大事な仲間です。嶋津氏のますますのご健筆をお祈りするばかりです。

(全作家協会事務局長 野辺慎一)

「全作家」合評会風景



〒123・0864
東京都足立区鹿浜3・4・22のべる出版企画内
全作家協会 TEL 03-3896-6506

全作家協会

沈む町

武田純子

朝、障子を開けたら、世界が消えていた。創造の時と同じように天も地もなく混沌の白が渦巻いている。我が家だけを残して、塀の向こうの世界は消え去っていた。

ざくりとするのは寝ぼけた一瞬のことだ。すぐによく起る現象であることを思いだす。塀の向こうには、濃い霧が立ちこめていた。羽毛布団のように分厚い霧。秋から冬にかけての早朝、この町はすっぽりと霧に覆われる。高い山の頂きから、眼下を埋めつくす霧を眺めた時の美しさを称えて、雲海ならぬ、霧の海と呼ばれることもある。しかし下界で暮らす住民にとっては、ただ視界を閉ざすべールに過ぎない。

いつものように、柴犬のチョコを連れて散歩に出た。

住むことになった。それが九月中旬のこと。それから秋が進むにつれ、毎日のように霧がかかるようになった。日によって濃い薄いはあるが、世界が消えたと見紛うほど濃いことはしばしばだ。

家を出る時は、家のまわりに霧はなく、我が家だけは霧の侵略から逃れられたのかと思う。けれどチョコに引きずられてしばらく歩き、ふと振り向くと、我が家は消えてしまっている。白い波に飲まれて、世界と共に消えてなくなっている。生き残ったのは私とチョコだけ。私も消えてしまふ方になりたかったと思う。霧に取りこまれ、同化していなくなってしまうたい。消えずに生き残っていたところで、何もいいことなどないのだから。

「なんで会社辞めちゃったの？ もつたいない。最近の若い人は、甘やかされて我慢を知らないって、本当なんだねえ。将来をまじめに考えないと、困るのは自分なのに」

前の家にいた頃、叔母が母に言った台詞だ。私は他の部屋にいたけれど、叔母のよく通る声は、聞くつもりがなくても耳に入ってしまった。

「あの子もいろいろあったんよ」

母の弱い擁護は、叔母の耳には届かなかった。

氷河期のさなか、厳しい就職活動を経てやっと入った会社の内実は、ブラック企業すれすれだった。過大すぎるノルマ、連日夜中までのサービス残業。しばらくは頑張った

「あんたは他にすることがないんだから」

と、母は犬の世話を私の役目にした。外に出ると、ある程度の距離までは見通すことができるが、その先は白く重い圧力がかかり何も見えない。チョコが元気に歩きだし、私も引きずられるように足を前に出す。数メートルも離れた隣家は白くかすみ、道の両脇の田んぼには、ささくれた稲の切り株が死にかけている。ずいぶん田舎に引越してしまつたものだ。まあ、ひきこもりの女には、田舎でも都会でも関係ないけど。

田舎の祖母の認知症がひどくなったので、父と母は今まで住んでいた都会の家を引き払って、祖母の家に引越すことにした。ひきこもっていた私も、自動的に祖母の家に引越して、仕事のきつさに心身は疲弊し、人格まで否定する上司の怒鳴り声に耐えられなくなり、一年で退社した。忍耐のない、わがままな若者と言われれば、そうかもしれない。会社を辞めてこの先どうするのか。新卒でなくキャリアアもないのに、正社員でちゃんと再就職できるのか。しても耐えていけるのか。私は本質的に社会人失格なのではないか。

自分自身についても、将来についても、希望の灯りはどこにも見えなくなり、私は黙って家の隅にひきこもることにした。最低限の買い物など以外では、ずっと家から出なかった。今、チョコの世話を引き受けてしまっているのは、引越しの慌ただしさに流されたからだ。

チョコが激しく吠えだした。前方から霧に絞りだされるように、一人のおばあさんが現れた。チョコの散歩をする時間に、よくすれ違う人だ。曲がった腰で、乳母車をゆくり押し歩いてる。乳母車には、ダックスフントが一匹乗っていて、チョコを見つめている。

「おはようございます。今朝も寒いですね」

その一言を言うべきなのは分かっていた。密集する霧と同じくらいの密度で、挨拶をしろという脳の命令が締めつけてくる。けれど私は口にはできない。吠えるチョコをそのままに、顔をうつむけて、おばあさんとすれ違う。おばあさんが会釈をした気配が流れてくる。挨拶もできないな

んで、私はなんてダメな人間だろう。でも他人が怖いのだ。上司のあのがなり声、先輩や同僚の冷ややかに濁った目、数えきれないほど突き刺さった言葉……。

チヨコに導かれるまま高台へ上る。眼下にあるはずの我が家はどこにも見えない。真つ白な世界がどこまでも広がっている。田んぼも神社も山も、何も見えない。空まで見えないと、町は本当に霧に閉じこめられているんだなど実感する。この町だけ世界から切り離されて、別の次元へ飛ばされてしまったのではないだろうか。

口を広げても広げても、酸素が肺を満たさない。息苦しさ目覚める朝が時々ある。はっと目を開けて、魚がついばむように口をばくばくさせる。上着を羽織り、障子まで這っていつて外を覗くと、縁側とガラス戸の向こうに真綿がぎゅうぎゅう押しあいへしあいしている。

「おはよう。散歩、行ってくる」

「おはよ。チヨコの服洗うから、洗濯機に投げといて」

母の指示通り、一晩中着ていたチヨコの服を脱がせる。背中のチャックを開けてピンク色の服を足元に落とすと、チヨコが盛大に身震いした。私はコートを着こみ、マフラーを巻く。外に出ると、数メートル先より遠くは、地面から空まで真綿が隙間なく敷き詰められている。ぬいぐるみの中に詰めこまれたらこんな感じなのだろうか。

今日は一段と霧が濃い日だった。これだと十二時すぎまで霧は晴れないかもしれない。

「チヨコ、草は食べないで」

道端の雑草に顔を突っこむチヨコを、むりやり引つ張る。歩いて歩いても霧は薄れることはなく、やがていつものように我が家も消え、世界に私とチヨコだけが生き残る。

なるほど、これでは息苦しいのも無理はないかもしれない。ここは、霧の海という名の海の、底にあたるのだから。この町の住人はみな、海底に住んでいる。夜の間に発生した霧の海に、私たちは眠っているうちに沈んでいく。そして水のような霧におぼれて、苦しさに私は目を覚ますのだ。

顔を上げて、白い壁以外は目に入らない。今歩いているこの場所は、水面からどれくらい下なのだろう。ふと、この間テレビで見た、深海の映像を思いだした。巨大イカを追うというテーマの下に、摩訶不思議な形状の深海魚たちも紹介されたのだ。光の届かない深海で生きてきた魚たちの姿は、どこか人間を不穏な心持ちにさせるところがある。同じ地球の生物とは思えない。宇宙人と言われれば納得するだろう。

「ワシの靴下、まだ乾いてないんか」

「まだよ。昼まで霧があつて太陽が当たらんから、なかなか乾かないんよ」

「ストープの上に干せばええじゃろ」

緒に座っているが、知っているはずの相手が誰だか思いた

せず、適当なあいづちを打つだけだ。

「おいくつなんですか、娘さん」

「二十六です」

「お仕事は何されとつてんです」

「……今はしてないんですよ」

「そうですねえ、昼間も家におつてのようですよ、おかしいな、お仕事しとつてんないんかなと、気になつとつたんですよ。結婚は？」

「いえ、まだ……」

「そうですね……何か理由があつて、家におつてんですか？」

女性は、壁を隔てて私が聞いているとも知らず、根ほり葉ほり私のことを尋ね始めた。決して気持ちのいいことではないが、彼女が気にするのは分かる。いい年した大人が、仕事もせず毎日にこもつていれば、誰だつてワケありだと思ふだろう。母に尋ねるならまだいい方で、もし私に直接聞いてきたら、一言も発することができず走つて逃げてしまふかもしれない。正直に答えればきつと、叔母と同じことを言われるだろう。私の心は、道路に投げ捨てられた雑誌のようにぼろぼろになつてしまふ。

だから私は、近所の人とできるだけ顔を合わさないようにしている。外には極力出ない。出る時は、親の車で。チ

「絶対やめてよ。火事になるじゃない」
 昨晚の父と母の会話だ。太陽が当たらないために洗濯物も乾かない、この町。光の届かない霧の海の底をこうして漂う私も、深海魚と言えるかもしれない。私もあんな姿をしているのだろうか。宇宙人のような、他人に容易に受け入れ難い、異質な姿を。

また、霧の奥からいつものおばあさんがにじみでてきた。乳母車にダックスフントを乗せて、ゆつくり歩いてくる。
 「おはようございます。冷えますね」

たった一言、言わなければ、言わなければ。道路を見つめたまま念じ続けるうち、おばあさんは私の脇を通り抜けてしまふ。きつと私のことを、いい大人のくせに挨拶ひとつできない、陰気で愛想のない女だと思つてのことだろう。もしかしたら近所の人に「杉山さんの娘さんてば挨拶もできんのんよ」と悪口を言つているかもしれない。ああ、恥ずかしい。でも自業自得だ。

「そういえばおたく、娘さんがおつてんでしょ」
 「おりますよ」

引つ越してきてまだ二ヶ月。父は近所に昔なじみが多いが、母はほぼ初対面の人たちの顔を覚えるのがやつとで、なにかにつけ遠慮がある。昼過ぎ、母より少し年上の女性が来て玄関に腰を据え、母相手に長話を始めた。祖母も一

ヨコの散歩は、人が少なそうな時間を狙って、人が少なそうな道を選ぶ。一人の時に家に客が来たら、居留守を使う。「まあそれでも、親としては心配ですよねえ。ええ仕事か、ええ旦那さんを、早う見つけてくださいいねえ」

チヨコの吠え声を背中に受けながら、女性は帰っていった。玄関の隣の部屋で、膝を抱えて座りこむ。まわりは隙間なく真つ白い闇に塞がれていて、真つ白な真綿で首をじつくり締められているようだ。希望の灯りはどこにも見えない。

家の中ではストーブの前にうずくまっているチヨコだけ、散歩の時は寒さも気にならないようだ。枯れた田んぼやのり面は、粉砂糖を振りかけたように均一に霜で覆われていて、その凍てつきを目にするだけで、人間の背筋には寒気が張りつくというのに。

白い霧と白い霜に静まりかえる世界を、白い息を吐きながら私は歩く。ふと、見慣れない形の木が、道から離れたところに立っていることに気づいた。今にも折れそうに細くしなつた幹の先に、栄華の記憶のようなわずかな枝葉がしがみついている。昔話の翁を思わせるようなあんな木、あそこにあつたのだろうか。霧のない日にも散歩はしているが、まったく見覚えがない。

しばらく木を見つめながら考えるうち、これが霧の力に

た。続いてまた影が現れる。先程と同じくらいの大きさのものが、滑らかに体をひねって走り去る。いや、正確に言えば泳ぎ去っていった。今度は小さな影が無数に現れた。群れのまま漂い、進行方向に悩みながら泳いでいく。

それは間違いなく魚だった。影しか見えなけれど、水族館でガラス越しに見た光景と同じだ。魚の影は、次々に後方から現れ、前方へ泳いでいく。霧が水であるかのよう、我が物顔で。

そうか、ここは霧の海なんだから。海に魚がいるのは当たり前前だよ。

自分でも驚くほど冷静に、私は納得した。平べったい座布団のような影が、頭上を滑っていく。数匹の魚が続いてから、また座布団の影が私を抜き去っていった。体を愉快げにくねらせながら。

それから霧の日にはしばしば、魚たちの影を目にするようになった。大群が泳ぐ日もあれば、一匹二匹しかいない日、まったく泳いでいない日もある。クジラと思われる巨大な影が目の前を横切った時は息を呑んだ。同じくらい巨大なイカが前方から向かって来た時は、悲鳴を上げて頭を抱えた。横を通り過ぎていったので、急ぎ振り向いて目を追った。深海の生物も混ざっているんだ。

どうして今まで魚たちに気づかなかつたのだろうか。突然現れたのか。私がぼんやりしていただけか。それとも……

よるものであると分かった。霧のない時は、あんな細い木は背景に混ざってしまったて気づくことはない。でも霧があれば、背景を隠してしまうため、木の存在がクローズアップされるのだ。

「ふうん。霧は見えていたものを見えなくするだけでなく、見えていなかったものを見えるようにもしてくれるんだ」

自分としては上出来の発見だと思った。帰ったら偉そうに母に話してみよう。ちよつと鼻歌が出てきた。チヨコがこちらを振り向く。白い息が唇の前に花開く。

何かが視界の端をよぎった。横を見たが、田んぼと霧以外に何も無い。黒っぽい大きなものが動いた気がしたんだけど。チヨコの様子に変化はないので、目の錯覚かもしれない。

少し歩いたところで、また黒っぽいものを感じた。今度は逆の側だ。見たけれど、やはり何も無い。目にごみが入つたのだろうか。リードを手首に引っかけ、両目を閉じて目尻をこする。そして目を開いた私が見たのは、霧の中に浮かぶ大きな影だった。

「えっ……」

影は道の真上の霧の中に浮かんでいた。白い霧にぼんやりと黒っぽいシルエツト。見覚えのあるシルエツトだ。

「これは……」

さつと身をひるがえして、影は霧の奥へ走り去っていった。

私が幻覚を見ているのか。もし幻覚ならば、これほどはつきり、しばしば見るなんて、少し不安だ。私の脳に何が起こっているのだろうか。チヨコが魚たちに反応を示さないことが気になる。何にでも吠えるチヨコが吠えないということは、魚が見えているのは私だけなのかもしれない。

考え始めると不安が増してきた。一番いいのは、他の人に魚が見えるか尋ねることだ。でも、親には尋ねたくないもし見えていない場合、娘はどうかしたのではないかと怪しまれてしまう。ただでさえひきこもって心配をかけているのだから。認知症が始まった祖母に聞くのは、混乱させてしまいそうなのでやめておこう。そうすると家族以外に知り合いいはないから、尋ねる相手がいなくなってしまう。どうしよう。

「あっ」不意にある人を思いだした。「ダックスフントのおばあさん……」見た感じ、頭はまだしっかりしていそうだ。

でも話しかけられるだろうか。これまで挨拶さえしていないのに。ここ数年、家族以外の人と言葉を交わしたことはほとんどない。まして、名前も知らない人にこちらから話しかけるなんて。

冷え冷えとした霧の中を歩く。今日も魚の影がちらりちらり泳いでいる。前方に、霧が寄り集まり固まつたかのようにおばあさんの姿が現れた。よし、行くぞ、頑張れ私。

一步、二歩、おばあさんが近づいてくる。チョコが吠える。ダックスフントが乳母車のふちに前足をかけて身を乗りだす。よし。

「あ、あの」

おばあさんが、毛糸の帽子をかぶった頭を上げた。

「あら、おはようございます」

しまった。先に言われた。

「あつ、お、おはようございます。えーっと、突然お尋ねしてすみませんが、魚、見えますか」

何を言ってるんだらう。意味不明だ。これではただの変な人だ。私は頭をかきむしる。おばあさんは小さな目を柔らかにくまばたきした。

「魚いうてのは、あれ？」

おばあさんが、田んぼの上に乗っかる白い空間を指さす。

黒い影が素早く走り抜けていった。

「そ、そうです。見えるんですか!？」

「見えるよ。まだ目は悪くなってないからね」

よかった。幻覚ではなかった。私には見えるべきものが見えていただけなのだ。安心して胸をなでおろす。と同時に、おばあさんの強い視線を感じた。しまった、私の方から始めたこの会話、どう収めればいいのか。何年も他人とまともに会話していないから、どうもつていけばいいのかわからない。

「で、あなたは」

「はっ……はいっ」

「見かけん顔じゃけど、どこの人なんかね」

「……あ、えっと、杉山の……」

散歩に出ておばあさんと会うたびに、長話をするようになった。真冬の午前中、しびれる冷気の中におばあさんを立たせていて大丈夫なのかと思うのだが、おばあさんは平気なようだ。おばあさんは自分のことやダックスフントのハナちゃんのことをたくさん話す一方で、私についても細かく尋ねてきた。あまり話したくなかったけれど、ごまかすこともできず、私は聞かれるがままに自分のことを喋った。前の職場のこと、辞めてひきこもった理由、いまだにそこから抜けだせないこと。

「そりゃあ大変じゃったね」

おばあさんは、上から目線で意見を言ったり、教訓を垂れたりすることはなかった。真摯に耳を傾け、同情を寄せてくれるので、逆にこちらが恥ずかしくなってきた。長い年月生きてきたおばあさんは、きつと私よりたくさん苦労をしているはずなのだ。早々につまずき、人生を投げ捨てひきこもっている体験談が、ひどく些細なものに思われてきた。

「そがなことはない。今の人は今の人で、難しいこともあ

るじゃろう」

おばあさんは、私と同じ高さで物事を考えてくれる。私は少しずつ心の底を見せるようになった。おばあさんの家はすぐ近くにあったので、上がりこんでお茶を飲みながら話をするようにもなった。よその家の上がるなんて、何年ぶりだろう。

「本当にこの町の霧って、すごいですよね」

「ほうよねえ」

畳に二人並んで座り、立ちこめる霧を眺めつつお茶を頂く。濃く注いだお茶は、ほんのり苦みと甘みが溶けあっている。

「この霧の町は、私みたいだと思えます。前も後ろも見通せなくて、光の届かない冷えた海の底」

朝っぱらから暗い話をしている自分に嫌気がさしつつも、おばあさんがじっと聞いてくれるので、つい言葉が漏れ出てしまう。

「このままじゃダメだと思っただけど、どうしたらいいかわからなくて」

「ふん」

おばあさんがうなずく。畳を走りまわっていたハナちゃん、私の膝に飛びついてきた。

「ひとつ聞いてみるんじゃないけど」

「はい」

「あなたは、どういう日に霧が出るか知ってる？」

「どういう日？ 確かに毎日ではないですよ……秋冬なら適当な日に気まぐれに発生するんじゃないんですか」

「ふん」

それから話題はおばあさんの孫のことになり、ひとしきりお喋りしてから私は腰を上げた。

「お邪魔しました」

玄関に縛っておいたチョコのリードをほどいて、外に出る。ずいぶん長居してしまったけれど、今何時だろう。霧はまだ、目の前に濃くかかっていた。けれど全体にはんやりと明るみがある。空に目をやると、霧の合間に靑空が覗き始めていた。わずかな青い切れ目は、あつというまに広がっていき、気づけば空全体が穏やかな晴れ空に変わっていた。山肌にしぶとく残っている霧が、直接太陽に照らされて、神々しく輝いている。稲の切り株を覆う溶け残った雪も、眩しくきらめいている。空気が刺すような底冷えが消え、皮膚にほのかな温かみさえ感じる。

「霧はねえ」

おばあさんが後ろに立っていた。

「晴れる日の早朝に出るものなんよ。霧が深いということは、その日はよく晴れる、いうことなんよ」

「霧の深い日は、よく晴れる……?？」

繰り返すと、おばあさんは満面の笑みを浮かべてうなず

いた。

言葉の意味を反芻しながら家に帰った。ちよūdと父と母が外で作業をしていて、遅かったねと言われたので、初めておばあさんのことを話した。

「ダックスフントを飼ってるおばあさん？」

「うん。家はすぐそこ。一人暮らし」

「そんなおばあさん、いたっけ？」

「さあ？このへんでダックスフント飼ってるなんて聞いたことないが。名前は？」

「あ、聞いてない……」

夕方、チョコの散歩ついでにおばあさんの家を探した。表札で名前を確かめようと思ったのだ。ところが、このあたりだと分かっているのに、それらしき家が見つからない。

いつも霧の中、おばあさんに案内されて行っていたから、きちんと道を覚えていなかった。それにしたって、戸数も少ないのだから見つかるはずなんだけど。あちこち歩き回ったが、ついにおばあさんの家は見つからなかった。

翌朝もまた、見事な霧が町を覆っていた。コートを着てマフラーを巻き、帽子をかぶってチョコと出かける。少し行くと我が家は見えなくなり、私は白い繭に包まれた。立木が幽霊のようにおぼろな姿で、白妙に色を添える。今は冷えこんで、前も後ろも霧に隠されているけれど、これだけ霧が濃いということは、後から爽やかに晴れるということ

とだ。この真っ白い世界では、想像もできないけれど。霧から紡ぎだされるように、おばあさんが現れた。いつもの乳母車にダックスフント。チョコが吠え始める。「おはようございます」

私は冷たい息を吐きながら、大きな声を投げかけた。

（「安藝文学」84号より転載）



たけだ じゅんこ

武田純子

1978 広島県生まれ
広島大学を卒業後、会社員を経て結婚
現在は、広島県内の山と田んぼに囲まれた夫の実家で暮らしている
「安藝文学」所属
2012「庄原文芸大賞」受賞
好きな作家は司馬遼太郎、村上春樹、ガルシ
ア・マルケス、アガサ・クリステイ=など

安藝文学 広島県

半世紀以上の変遷

創刊が昭和三十三年（一九五八年）、この年前後の生まれの同人も少なからず、であれば長距離ランナー氣息奄々（えんえん）と吐息ついても無理はない現状ではあるのだろう。

周辺をみまわすと、地名を冠したいくつもの誌名（しな）の消息が絶えていることに気づく。「讃岐文学」、「金沢文学」、「東北文芸」、「日田文学」等々……。それらのなかには、後継者がいないゆえに継続不能、もしくは主要人材の死亡に伴う自然溶解もみられる。

かつて、刊行物の交換は不文律の慣行であり、研（けん）を競うかのような時期さえあったものだが、いつ知れず途絶えがちとなった昨今ではある。

にもかかわらず、日本文藝家協会刊の年刊資料「文藝年鑑」には、常に数多い小説同人誌の所在が登録されている。が、お互いに見たこともない、交流のないグループが大半であって、それらの存立は孤立無援が信条と云わんばかりである。

「安藝文学」創刊の半年まえ、狭い居酒屋で、百号まで出

安藝文学



84号

してやろうじゃないか、と気炎をあげ、頷きあつては膝を叩いたものであった。そして現在にいたるわけだ。

されば先途、余すところ十数号。保存資料の収容棚に並ぶバックナンバーを眺めると、その背表紙どもが遠路遙々、辿りついた地点を無機質な表情で指し示すのである。かと思うと、地元の新聞が広いページを使って、同人たちの動向を事細かに、入念に紹介したり、刊行号に要したカネの多寡を論評の対象にあげたり、地域の文芸活動にたいする親切な鼓舞を惜しまない、そういう暖かいめぐみの季節もあつたのだ。

そういう思い出はさておいて、うすつべらの冊子に存外



安藝文学同人の道後温泉への小旅行会

な経費がかさみ、印刷屋の嫌味な催促に痛み入った辛苦を忘れるな。踏み倒して、そのつぐないにムシヨへ入ってもおもしろいぞ、などと冗談口を叩く奴もいた。それらがなべて甘やかな追慕の情にまとわれて、感慨をもよおすのも重ねた歳月がもたらす功德というべきである。

歳月の重みはまた、「選集・安藝文学」第一集の刊行の企画を招き、具体化した。自選を主軸に長短不問の小説とエッセイを集成、ハードカバーの単行本とし、永久保存版を意図したのであった。刊行までの作業がイベントであり、席を設けて祝うことはしなくても、祝意は仲間の紐帯を新たにしたものであった。

刊行までの作業にたずさわって、痛感したことがひとつある。それは、仲間うちの相互批評に生じていた手薄さを等閑にはいかなかったか、ということだ。

発刊後の合評会には、近隣の知己や相互交流のグループから招^{しょう}聘した幾人かが加わっているのが通例だが、或る号の或る作品について発言しあったにちがいないのに、ときには賛否の極論もあつたはずなのに、だれかの片言隻句ひとつ覚えがないのであつた。この作品について、だれがどう感想を、批評の言を提起していたか。作業の進行中に再読した作品のいまにして放つ美点が見落されたまま、作者

にも伝わっていないのではないか、といった危惧を拭えなかったことである。こんな優れた文章家の彼・彼女はグループを離れたあと、どこへ行ったものか、と惜しんだりした。「選集」の発刊を今後も続ける方針で、第二集の準備に入っている。継続を定めた理由のひとつは、お互いの営為の産物を再点検する機会を設けることであつた。歳月は読む力をいかようにも蓄え、鍛えるはずのものであろう。そうであればこそ、批評の眼は研ぎ澄まされる。

『未完の平成文学史』（浦田憲治・早川書房刊）の「プロローグ いま、なぜ平成文学史か？」は、「平成の文学はいわば、なんでもあり」の状況が続いている」という観測に立脚している。尤も、「純文学」がエンタメ含みの「文学」に混交しつつあることは、いまに始まったことではない。同人誌が即「漫画同人誌」の呼称であるように、文学同人誌は「文学老人誌」に様変わりし、若年層の多くはネット上に表現の場を得ようとする。

後継者不在をもつて、地域の文学活動の低迷を嘆くのは至極簡単な道理に過ぎず、座して待つ不毛の言い換えに他なるまい。「文学老人誌」に活路ありとするならば、「若さ」を取り戻す以外にない。

「若さ」？ それは若づくりに腐心することでもなく、若者ぶることでもない。永い歳月の積み重ねが蓄えた「批評

の眼」をお互いに向けあい、活気づくことから始まる想像と創造への踏み出しだ。

持続が即力とは信じない方が賢明だ。幸い、高齢者のポケットはどうか貧血を免れ、雑誌づくりに苦心惨憺のおそれだけは薄くなった今、逆に陥りやすいのは惰性的な号数重ねであり、戒心すべきは書き放しの満足である。

ここでこんなに肩肘張ってみせるのは、われながら滑稽に忸怩たるもの、なしとは云えない。けれども、「平成文学」に疎くなったおのれを知るにつけ、奮起の掛け声はわが身にこそ向きたい一念だけは否めないのである。

(岩崎清一郎)



安藝文学

〒七三二・〇〇〇二

広島県広島市東区戸坂山根二・一〇・二五

安藝文学同人会事務局 岩崎清一郎

TEL 082・229・2869